

東洋學報

第四拾貳卷第三號

昭和三十四年十二月

論 說

所謂シノ||カロシユティ―錢について

榎 一 雄

(一)

所謂シノ||カロシユティ―錢 (Sino-Kharosthi coins) とは、主としてコータン地方から出土する一群の古代貨幣であつて、その一面に漢字を、他面にカロシユティ―文字を刻してある所から、この名がある。カロシユティ―文字は古くバクトリア文字とも呼ばれたので、この貨幣はバクトロ||チャイニーズ錢 (Bactro-Chinese coins) とも言われ、或いはカロシユティ―文字をインド文字として、インド||チャイニーズ錢 (Indo-Chinese coins) と名づけられた。支那では、この貨幣の文様に馬が現わされている所から、これを和闐馬錢(1)と呼んでいる。

この貨幣が學者の注意に上つたのは、一八七四年ヤールカンドに派遣された第二回フォーサイス (Sir Douglas Forsyth) 使節團がコータンの東方、ケリア (Kerya) 附近の廢村の遺蹟から二枚の標本を採集し、大英博物館に齎してからのことである。一八七六年十一月十三日、ダグラス卿は王立地理學協會で「コピ大砂漠の流砂に埋没した諸都市について」(2)と題する

講演を行い、その中でこの貨幣の発見について、次のように述べている。

私がコータンに派遣したラム＝チャンド (Ram Chund) が齎し歸つた古物の中に、いくつかの貨幣があるが、中でも最も珍らしいのは、明かに紀元前一世紀のバクトリア王國の最後の王ヘルマイオス (Hermæus) のものである鐵錢と、コンスタンチヌス二世 (Constans II) ・ポゴナトゥス (Pogonatus) ・ユスティニアヌス (Justinus) ・アンティマロス (Antimachus) ・テオドシウス (Theodosius) の金貨とである。

ここに記されているヘルマイオスの鐵錢というのが、所謂シノ＝カロシユティエ錢で、フォーサイスはこれに注記してヘルマイオスの鐵錢は、恐らく最も古いものであることが明かになるかも知れない。但しそれはまだ完全には解讀されていない。

と言っている。鐵錢は實は銅錢の誤りであるが、大英博物館のガードナー (Percy Gardner) も「カーシユガル出土の貨幣」(Coins from Kashgar. Numismatic Chronicle, 1879, New Series, Vol. XIX, p. 274~281)、「大英博物館貨幣目錄」(Catalogue of Coins in the British Museum. Greek and Scythic Kings of Bactria and India. London 1886 p. 172, no. 4) にもこれを鐵錢とし、それに大小二種のあることを明かにするとともに、そのヘルマイオス發行の貨幣であることを主張し、カニンガム (A. Cunningham) も亦この讀み方をとつてヘルマイオスのものとした。⁽⁶⁾

一八八九年九月、ドゥ＝ラクープリは先づその詳しい研究をフランスの金石文藝學院で發表した。題して「紀元前一世紀のバクトリア文字・漢字銘文を有する一貨幣」(Une monnaie bactro-chinoise bilingue du premier siècle avant notre ère. Académie des Inscriptions et Belles-Lettres. Comptes Rendus des Séances de l'Année 1889,

Quatrième Série, Tome XVII, 1890, p. 338~348) とする。ドゥラークープリはこの中で、

(一) 大錢の漢字銘文は「錢^マ」重二兩四珠、小錢のは「半金」と讀むべく、半金の金は斬で、重量の單位である。

(二) 大錢のインド^{II}バクトリア文字銘文は、Maharajasa rajaditirajasa [Mahata?] sa [Hara?] mayasa [Hara...?]
と讀まれ、ヘルマイオスの名を示していると推定される。

(三) この大錢は月氏の王クジュラ^{II}カササ^{II}クシャナ (Kujula Kasasa Kushana) の發行したもので、月氏は支那文化の影響を受け、更にクジュラはヘルマイオスと同盟していたので、漢字とインド^{II}バクトリア文字とを有するこの貨幣を發行し、クシャナ人とバクトリアのギリシア人との通商に便にしたものと考えられ、その發行年代は紀元前四〇—三〇年頃であると思われる。

(四) インド^{II}バクトリア文字のない小錢は、バクトリアのギリシア人と交渉のなかつた時代の月氏の貨幣と見られる。

ことを指摘した。この中、(一)の「半金」は刻出の不完全な銘文を誤讀したもので、正しくは六銖錢とあるべきこと後述の如くである。クジュラ^{II}カササ^{II}クシャナは即ちクジュラ^{II}カドフィセスその人で、クシャナ王朝の創設者であるが、その貨幣の中にヘルマイオスの名を刻し、他面にカドフィセスの名を刻したものである所から、彼が王朝の創設に當つてヘルマイオスと密接な關係にあつたことが推測されている。ドゥラークープリがこれに着目して、この貨幣をクジュラ^{II}カドフィセスのものとしたのは面白い見方であつた。ドゥラークープリは當時大英博物館所藏の支那貨幣の整理に従事していたが、一八九二年刊行の「支那貨幣目錄」(Catalogue of Chinese Coins from the VII th Century B. C. to A. D. 621, including the Series in the British Museum by Terrien de Lacouperie, ed. by Reginald Stuart Pool. London 1892, p. 393~394) に「この貨幣を著録解説し、これを月氏發行のものとする前掲の推定を繰返す」とともに、

所謂シノ^{II}カロシユティー錢について 榎

大錢の漢字銘文を

金?重一兩四銖

と讀み改めた。

一方、ターリム盆地が古代文物の一大寶庫であることに着目したロシアは、現地駐在官に命じて古物の蒐集を行わせた。

英國もこれに刺激されて同様の蒐集を始め、その必要を主唱したヘルンレ (Rudolf Hoernle) のもとに、一八九三年以後、クチャー及びコータン出土の多くの古貨幣・古印章・書籍・古寫本の類が齎らされた。それはすべて土人や商人から買取つたもので、組織的な發掘によつたものではないが、その古貨幣の中にコータン附近の遺蹟から出たと言われる七十二箇のシノ||カロシュティー錢 (大錢九、小錢六十三) が含まれていた。ヘルンレは、一八九九年、ペンゴール亞細亞學會雜誌の特別號として刊行された「中央アジア古物の蒐集」(A Collection of Antiquities from Central Asia, Pt. 1, JAS of Bengal, Extra Number 1, 1899, p. 1~16=Indo-Chinese Coins in the British Collection of Central Asian Antiquities, Indian Antiquary, XXVIII, 1899, p. 46~56) の中にこれらの標本に關する精細な調査の結果を發表した。

④大錢にはカロシュティー文字及び漢字の銘文があり、前者に三種あるが、小錢は馬の文様のあるもの (カロシュティー文字及び漢字の銘文あり) と駱駝の文様のあるものとの二種に分かれ、馬のには三種 (第一―三種)、駱駝のには二種 (第四―五種) のヴァリアントがある。

⑤カロシュティー文字銘文には、(a)二十字ほどのもの (大錢及び駱駝文小錢の或るもの)、(b)十三字ほどのもの (馬文小錢) の二種があり、それらを比較すると、

(a) *Maharajasa Rajatirajasa Mahatasa Gugramayasa (or Gugramadasa or Gugradamasa)*

(b) Maharajuthabi(or 'juthubi or 'yuthabi)raja Gugramadasa(or 'damasa or 'modasa or 'hidasa) と讀ぶ。
No。

⑤ uhabiraja は *Skt. pṛthivī-rajā, Pāli Pkt. puthavī-rāja or puthuvī-rāja* と同く、"King of the earth" の意味である。

⑥ 王は (1) Guqramada, (2) Guqramada, (3) Guqramaya, (4) Guqramoda, (5) Guqrāda の五人であるが、或いは (1) = (4), (2) = (3) と、三人であるとも考えられる。これらの名に共通する Guqra (或は Gurga) が王家の姓であろう。

⑦ 漢字銘文は、大錢のは重兩四銖銅錢、小錢のは六銖錢と讀ぶ。

⑧ 平均重量は大錢は二七・四八グラム、小錢は四八・七二グラム、小錢は四八・七二グラム(三・一一八〇グラム)。

⑨ これらの貨幣は紀元七〇—二〇〇年代の後漢の支配の下にあつたコータンの王の發行したもので、支那記録に于闐王として記されてゐる廣德(A. D. 73)・放前(129~131)・建・安國(159~?)・山習(220~226頃)の五代がこれに當ると思われるが、⁽⁵⁾支那記録のこれらの名は支那名で、貨幣の名はそのトルコ語名であろう。王家の姓と見られる Gurga は Dharna に相當するウイグル語であるかも知れない。

⑩ 裸馬及び駱駝の像(すべて右向き)は、前五〇年から後八〇年まで、パンジアーブとその隣接地とを支配したマウエス(Maues)・アゼス(Azes)及びそれに續いた Scythian kings とコータン王との間に、或る特別の關係があつたことを暗示してゐる。

と説明した。

ヘルンレのもとに集つた標本は、その後一九〇一年までに更に二十五箇を加え、合計九十七箇に達した。その内譯は、大錢十箇、小錢八十七箇で、小錢の中、第一種は二十三、第二種は十六、第三種は四、第四種は七で、この結果、平均重量は大錢二二・一・一グレイン(二三・五一〇グラム)、小錢四六・〇八グレイン(二・九五九グラム)と變つた。ヘルンレはその報告の第二部 (A Report on the British Collection of Antiquities from Central Asia, etc., Extra-Number to JASB, LXX, Pt. 1, 1901) で増加分についての補考を發表し、

(A) 小錢第四種は、その重量が十三グレイン乃至四十グレインしかないので、四銖錢であつたかも知れない。この種の標本は七箇あつて、合計一八九グレイン、一箇平均二七グレインで、四銖即ち三二・四八グレインに近い。

と述べ、更にシノ||カロシユティ―錢に関するブシェル (Stephen W. Bushell) の考説を紹介している。その要點を記すと次の通りである。

(A) 大錢の漢字銘文は chung (1) nien (2) ssü (3) chu (4) lü (5) chien (6) [重廿四銖鉛錢] と讀まれ、"Engraved (5) Money (6) Weighing (1) twenty (2) four (3) chu (4)" の意味である。lü [鉛||錢] は engraved の意である。この字は銅の字に似ているが、銅とは讀めない。

(B) 二十四銖は一兩で、六銖錢即ち小錢四箇が大錢一箇に當る。

(C) 大錢の中央のシムボルは貝の字とは思えぬ。それは寧ろ月桂樹の環 (a laurel wreath) ではないか。デュトルイユ||ドゥラン採集の貨幣の一つのカロシユティ―文字銘文の中央にもこの符號がある。

(D) 小錢第三種の漢字銘文の中央にある Y という符號はカニンガムの發表したエフタルのシムボルに似ている。

(甲)小錢の漢字「六」にいくつかの書體があるが、その或るものは他よりも古い。但しこれは書體が古いのであつて、貨幣が古いことを意味しているのではない。

(乙)この漢字の書き手は支那人であつたに相違ない。

(丙)これら貨幣の中、古いものは、漢字「」の書體」から考えて恐らく前漢に屬し、後漢には降らないと思われる。東トルキスタンは前漢に征服され、王莽の時に至つたが、その後六十五年間獨立したか、匈奴に從屬したか、再び後漢に征服されたことに注意したい。

この中、(甲)は銖字の金偏のくづれた(或いは不完全に金字を横した)形を符號と解したもので、明かに誤解である。

一方、一八九〇年から九五五年にかけてターリム盆地とその周邊地域の調査に従つたデュートルイユドゥラン (J.-L. Dutreuil de Rhins) の一行も、亦コータンでフヴィシユカ (Huvishka) の貨幣とともに、大錢二箇、小錢二箇、合計四箇のシノロカロシユティヤ錢を採集し、スベヒト (Ed. Specht) がこれを研究した。それは調査報告の第三冊 (Mission scientifique dans le Haute Asie 1890~1895, III, Histoire-Linguistique-Archéologie-Géographie par F. Grenard, Appendices scientifiques, Paris 1898, p. 129~133) に掲げられてゐる。その大要は次の如くである。

(一)大錢のカロシユティヤ字銘文は、文字が不鮮明で、…sa Maharajasa…としか讀めないが、大英博物館のより完好な標本のは「非常に明瞭なカロシユティヤ文字で (en caractères Kharoṣṭhī très lisibles)」Hermayasa と書いてある。これに當てられるのはバクトリアのギリシア人王第二十代のヘルマイオス以外にないが、ヘルマイオスがコータにいた筈はないので、恐らくバクトリア王に支配されていたコータンの王の製作したものか、インドロバクトリア (Indo-Bactriane) の首府で造られた國際通貨か、その何れかであらう。

⑤小錢の一つには漢字の銘文があり、ドゥヴェリア (M. G. Devéria) の解讀によると、六銖錢と書かれている。ドゥヴェリアによると、支那で六銖錢の鑄造されたのは五七九年〔陳、宣帝、太建十一年〕で、その他にはなかつた。

⑥小錢の他の一つは、磨滅の程度の甚しいものであるが、カロシュティエ文字の銘文と漢字の銘文とがあり、前者はドルアン (E. Drouin) の解讀によると、RA-CA-HA-THI の四字しか明かでなく、後者はドゥヴェリアによると、五朱と讀めるが、朱の字を銖の代りに用いたのは四六五年〔宋、明帝、泰始元年〕に始まり、その次は五〇二―五五六年〔梁、武帝―敬帝〕即ち梁代のことであるという。しかしカロシュティエ文字がこんな後にまで用いられたことは、頗る疑わしい。

即ち、スペヒトは、紀元前一世紀頃のヘルマイオスに關係づけられる大錢と、紀元五、六世紀に降る可能性のある小錢との年代の不一致に疑問を投げながら、これを解決すべき方法を發見し得なかつたようである。ドゥヴェリアの所見は流石に銳利であるが、これについては後に觸れる。

イギリスやフランスの關係者がシノ||カロシュティエ錢を蒐集している間に、ロシアでもこれを集めていた。それはペトロフスキイ (Petrovsky, Petrovskii) がコータン附近から採集したもので、エルミタージュ博物館に收藏されている。フラン (Ed. Blanc) の記述に従うと、

總計二十一箇。その中、十七箇は銅貨で、一面には、馬の像の周圍にアリアン||パリー文字 (caractères aryens-pâlis) の銘文があり、他面に漢字の銘文がある。一箇は銀貨で、一面に馬の像の周圍にパリー文字の銘文 (une légende en caractères pâlis) があり、他面に漢字の銘文があるが一部分磨滅し、文字が變形していて、*が*と書かれている。残り二箇は銅貨で、一面には瘤の二つある駱駝の像があり、他面に同様の銘文がある。

この記述によると、最初の十七箇は大錢、次の銀貨は小錢で、一面にアリアン \parallel パーリ文字即ちカロシユテイー文字の銘文があり、他面の漢字銘文は後述するように、六銖錢とあつたので、變形の二字はとも六を示していると考えられる。最後の三つは同じく小錢で、カロシユテイー文字銘文を缺くが、漢字銘文（これも六銖錢とある筈）をもっているものと推定される。「他面に同様の銘文がある」というのは、漢字銘文を指しているのでなければならぬ。それは、ヘルンレの分類が明かにしている通り、駱駝像のあるシノ \parallel カロシユテイー錢の或るものは、カロシユテイー文字の銘文を缺いているからである。ブランは右のカロシユテイー文字銘文はまだ完全には解讀され得ないが、ドゥ \parallel ラクープリの解讀したのと同様であると思われるとし、ガードナーは中に鐵錢があるというが、ペトローフスキイ蒐集の標本は、中に一見鐵のように見えるものもあるが、實はすべて青銅 (Bronze) であることに注意している。但し漢字銘文をラクープリと同じく半金と讀み、班超の金と解して、これを班超發行の貨幣であろうと推定しているのは頗る無理である。ペトローフスキイ蒐集のシノ \parallel カロシユテイー錢については寡聞にして他に記述のあることを知らないが、シノ \parallel カロシユテイー小錢に銀貨のあることは珍重すべき事實でなければならぬ。(大英博物館收藏の中にも銀小錢が一枚ある。これについては後に述べる。)

(二)

二十世紀に入つて、ターリム盆地の遺蹟の調査がしきりに行われるようになると、シノ \parallel カロシユテイー錢の標本も次第にその數を加えた。中でも最も組織的な採集をしたのはスタインでその總計は一八七箇に上つている。彼は先づ第一回の中亞探検 (一九〇〇—一) でヨートカン (Yokkan) 及びゴータンで合計八十八箇 (大錢十九、小錢五十七、不明十二) のシノ \parallel カロシユテイー錢を購收した。その内譯は次の通りである。

| 購 收 (又は出土) 地 | 大 | 小 | 不明 |
|-------------------|----|----|----|
| Yötkan | | 2 | 6 |
| Khotan (Yötkan ?) | 14 | 30 | 6 |
| 傳 Chalma-Kazän | 4 | 3 | |
| 傳 Hanguya Tati | 1 | 20 | |
| 傳 Ak-Sipil Tati | | 1 | |
| 傳 Mazär-Tagh | | 1 | |
| 合 計 : | 19 | 57 | 12 |

スタインは、ヘルンレの説明を紹介し、その結論を正しいものと認めたが、

(一) 自分の入手し、或いは見ることを得たシノ||カロシュティー錢の出土は、小數の不確かなものを除いて、ヨートカン遺蹟に限られているので、この貨幣の行われたのが「嘗ての」コータンの首府〔即ちヨートカン〕を中心とする限られた地域で、その通行の年代も非常に長い期間に亘つていたとは考えられない。

(二) ヘルンレはこの貨幣の年代を紀元二世紀の末を降らないといっているが、ニヤ遺蹟出土のカロシュティー文書は二六九年度の年紀のある支那文書と併出しているので、コータンにおける支那の影響が後漢の終末(二二〇年)と共に終つたのではないことは明かである。従つてシノ||カロシュティー錢の年代はなほ研究の餘地がある。

(三) ヨートカンで購收した貨幣の中で最も古いと思われるものは、Kujula-Kara-Kadphises 及び Kanishka の貨幣である。ヘルンレの蒐集の中にも、コータンで得たものの中に多數のカニシュカの貨幣がある。

ことに注意した。これらスタイン蒐集の貨幣の整理調査に當つたブシェル (S. W. Bushell) とラフソン (E. J. Rapson) は、コータン購收のシノ＝カロシユティー大錢の一つ (Y. 001) に就いて、その支那文字銘文を chung nien ssü chu yü chien [重廿四銖鉛錢] と讀み、大型の他の一つ (Y. 0025) のカロシユティー文字銘文を [...sa] ra [ja] tirajasa [/// /// ///] sa gugamo [ya] sa と讀んだ。⁽⁸⁾ この中、支那文字銘文はヘルンレが「重兩四銖銅錢」と讀んだのを訂正したもので、銅が銖のように見えるので、これを鉛と解したものであるらしい。(これはヘルンレのように銅と讀むのが正しい。後文二八頁參照。)

スタインはその第二回の探檢においては、計七十六箇のシノ＝カロシユティー錢を購入した。⁽⁹⁾ この時の蒐集もコータンとその附近の遺蹟に限られているが、第三回 (一九一三—一六) にも計二十三箇を購收している。⁽¹⁰⁾

| 購 收 地 | 大 | 小 | 不明 |
|--------------------------------|---|----|----|
| Yarkand | | 1 | 8 |
| Khotan (Yötkan) | | 17 | 20 |
| Khotan (Yötkan ?) | | 8 | 2 |
| Khotan (miscellaneous origin) | 9 | | 4 |
| Tati sites (E. of Yurung-kash) | | | 7 |
| Tati sites (N. W. of Domoko) | | | |
| 合計 : 76 | 9 | 26 | 41 |

| 購 收 地 | 大 | 小 | 不明 |
|------------------------------|---|---|----|
| Khotan | | | |
| Moldovack 寄贈 | 1 | 2 | 5 |
| 傳 Kizil-yar 出土 | | | 1 |
| Badruddin khān より購入 | | | 3 |
| Domoko附近 (Badruddin khān 採集) | | | 1 |
| Kuchā | | | 7 |
| 傳 Yulduz-bāgh 出土 | | | 3 |
| 合計 : 23 | 1 | 2 | 20 |

特に第二、第三回の探検に當つて採集されたものの中に、ヤールカンドで購入したもの一、クチャアで購入したもの七、更にユルドゥツバーク出土と傳えられるもの三（クチャアで購入）のあることは、注目し得る。それは言うまでもなく、シノカロシユティエー錢が嘗てこれらの地方に行われた可能性を示しているとも解されるからである。

ヘルンレの要請によつてインド政府が蒐集したシノカロシユティエー錢も、スタインの採集したそれも、共に大英博物館に收藏されている筈である。しかし、一九五二年十月から四五年五月までの間に私が調査することの出来たのは、ヘルンレの研究したものの一部と、スタインの蒐集を含めぬその他のもの若干、合計八十六箇（大錢九、小錢七十七、小錢の一つは銀貨、他はすべて銅貨）で、この中、ヘルンレの研究したものと明確に比定出来るのは五十四箇（中、大錢六個）あり、それにはすべて一九〇二年インド大臣から移管された旨の Press Mark がついているが、ついていないものの中にも、へ

ルンレのものに相違ないのがある。これだけしか公開されないのは、第二次大戦中他に疎開していたのを持返つた直後で、整理が全く出来ていないからという説明であつた。私の實見した標本の中、ヘルンレが見ていないと思われるのは、次の二箇である。

No. 2. AR Small

1925 D. Col. R. A. Lydu

Ob. 文様明かならず

Kh. legend: ...ja gugrama...

Rev. Ch. legend: 大鉄錢

No. 61 AE Small

65/S-2/-Bush

Ob. Horse standing to right.

Kh. legend: illegible

Rev. Ch. legend: 大鉄錢

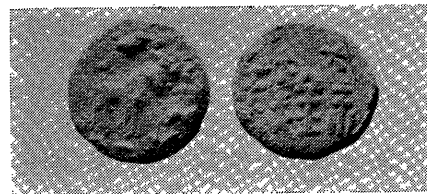
また一八九三年七月二日に大英博物館に寄贈されている次の一箇は、年代からいうとヘルンレの注意に上つていてよいのであるが、彼が確かにこれを見ているという證據はない。

No. 60 AE Small

Presented by Mrs. Younghusband 2 July 1893. Brought from Central Asia by her brother Shaw.



(1) シノ=カロシュティール大錢
(A. Stein, Serindia, Pl. CXL)



(2) シノ=カロシュティール小錢
(*ibid.*)

Ob. Horse standing to right.

Kh. legend: illegible.

Rev. Ch. legend: 大鉄 [鐵]

このヤングハズバンズ夫人は Major-General J. W. Younghusband の夫人で、もと Clara Jane Shaw と言い、中央アジア探検家として名高いロバート・シヨー (Robert Barkley Shaw, 1839~1879) の姉に當る。⁽¹¹⁾ 一八五六年に結婚、その次男が中央アジア探検家フランシス・ヤングハズバンズ (Sir Francis Younghusband, 1863~1942) である。シヨーは一八六八年十二月ヤールカンドに着き、一八六九年一月カーシュガルに至り、五月までターリム盆地に滞在、一八七〇年八月フォーサイスとともに再びヤールカンドを訪れ、一八七五年、三度ヤールカンドに行き、一八七九年六月十五日、ビルマのマングレイに歿しているから、⁽¹²⁾ 彼の姉が大英博物館に寄贈したシノ・カロシュティイ錢は、この何れかの機会にカーシュガルかヤールカンドかで入手したものであらう。

また大英博物館收藏品の中にはカーシュガルで採集されたと思われるものがあるというが、⁽¹³⁾ それが何箇でどれであるか、又カーシュガル出土なのか、そこで購入されたのか、残念ながら今日まで確める機会を有しない。

シノ・カロシュティイ小錢はラホルのパンジャーブ博物館にも二箇所蔵されている。ホワイヘッド (R. B. Whitehead) の目録にはこれを Indo-Chinese Rulers のものとする。

Æ Weight 50 Size 75

Ob. Ch. legend: Luh tchu tsien [大鉄錢], i. e. 'six tchu (of) money'.

Rev. Horse or wild ass to right. Kh. legend: ...tira...

G. B.

と記してゐる。G. B. とは G. B. Bleasby の蒐集の意味で、この蒐集がバンジャープ博物館の貨幣蒐集の基礎をなしているのである。しかし、ブリースビーがこれを何處で入手したかは明かない。ホワイトヘッド氏は所謂 Indo-Chinese coins のすべてがコータン及びその附近から出ている事實を注記し、(ヘルンレに従つて)この貨幣の年代を紀元一―二世紀に置いている。⁽¹⁴⁾

支那でシノ||カロシユティ―錢が學者の知見に上つたのは、十九世紀の末以後のことのようで、王樹枏はこれを見た形迹があり、⁽¹⁵⁾ 近くは黃文弼氏が、一九二八―二九年の調査で、コータンの北の阿克斯比爾 (Aq-Safil or Aq-Sapil) 舊城から大錢一箇(一四・八グラム)を採集している。Aq-Safil は即ちヘルンレ蒐集の中の十一箇(大錢一、小錢十箇)が発見された所である。⁽¹⁶⁾

(三)

ヘルンレ・ブシエル・スタインの研究に對して異説を提起し、所謂シノ||カロシユティ―錢がコータンの貨幣ではなく、ヤールカンドの貨幣と看做すべきことを主張したのはトオマス (F. W. Thomas) である。氏は一九四四年 'Sino-Kharosthi Coins (The Numismatic Chronicle & Journal of the Royal Numismatic Society, 6th Series, Vol. IV, 1944, pp. 83~98) を發表して、次のように論じてゐる。

(一) 前漢の末にはコータンは依然として小國で、人口は一九、三〇〇人を数えるに過ぎず、その東隣の手(拘)彌國より少なかつた。五〇―六〇年にはヤールカンドに服屬し、六一―六二年に至つてヤールカンドの支配を脱するに及び、次第

に勢を増したが、間もなく匈奴に支配され、七三年解放されると、後漢の支配を受け、その守備隊の駐屯を蒙つた。一五〇年頃までこの状態が續いたが、一七五年頃、于(拘)彌國を併せて、その勢最も張るに至つた。支那守備隊が駐屯した七三年は、シノ||カロシユチー錢の行われた年代として似つかわしいので、ヘルンレもこの貨幣の年代を一〇〇年頃から二〇〇年頃に置いているのであるが、二〇〇年頃まで降したのは不當で、この頃トルキスタンにおける支那の勢力は紀元前一世紀時代以上に支配的ではなかつたであらう。

㉔カロシユチー文字の銘文の王名は、Gugramada, Gugradama, Gugratida (d₂₅ n とも讀める)であるが、(1)前林 (A. D. 25~55)。(2)戎王 (A. D. 50~51 以後)。(3)位侍 (A. D. 50~51)。(4)都末 (A. D. 60, 即位せよ)。(5)休莫霸 (A. D. 60)。(6)廣德 (A. D. 60~86)。(7)放前 (A. D. 129~132)。(8)建 (A. D. 151~152)。(9)安國 (A. D. 152~175)。(10)山習 (A. D. 220~226) の名で支那記録に出てくるコータン王の名は、(6)を除いて、何れも原名の音譯であると思われるのに、これに當てはまらない。

㉕況んや、コータンのような小國の王が、貨幣の銘文にあるように、maharaja (great king), rajatiraja (over-king of kings), maharajuthabi (or °juthubi or °yuthabi) raja (great king earth-lord) の號を稱したとは考えられない。

㉖フェルガーナ・ワハン (Wakhan)・捐毒・休循・烏孫・匈奴はカロシユチー文字と無關係であつたり、貨幣をもつほどに文化が進んでいなくなつたりするので、この貨幣の發行者と看做すことは難かしい。カーシユガルもヤールカンドに支配されていた小國で、勢盛んとなつたのはコータンより遅く、一三二年后漢に協力してコータン王放前を伐つた時以後で、一七〇年には大いに強くなつて、後漢とクチャー・カラシャル・車師との連合軍の攻撃を退けている。その

後大いに衰えたが、三世紀に至つて再び抬頭してヤールカンド・西夜・依耐・蒲犁を含むトルキスタン西部の十二國の支配者となつた。しかしシナ||カロシユティー錢を三世紀まで降すことは出来ない。その上、カーシユガルはパミールやギリシア文字と關連のある地域で、カロシユティー文字の輸入とは無關係である。

(四)クチャーは前漢代人八一、三一七人を数えたが、その位置から言つて、匈奴に依存していたので問題にならない。紀元四六年、一時ヤールカンドに征服されたことがあるが、クチャーが古い時代に獨立しようとしたことについての確證はない。言語から考へても、クチャーに行われていた所謂トハラ語には g・d・b 音がない。

(五)結局、残るのはヤールカンドだけである。

こうしてトオマスはヤールカンド即ち莎車がシノ||カロシユティー錢の發行地として適當である理由を次の如く説明する。

(六)前漢時代、ヤールカンドの人口は、コータン・カーシユガルの人口と同じ位であるが、前三二年〔成帝建始元年〕頃から他の諸國より強くなり、漢に大いに親近し、匈奴に反感をもつていた。莎車王延 (c. 32—18 B.C.) は漢から「忠武王の」諡を授けられた。その子康 (18 B.C.—A.D. 38) は二八年〔二八—二九年、建武五年〕西域大都尉に任ぜられ、「五十五國皆屬焉」と記されている。その子〔實は弟〕賢は一世紀の中頃には支那トルキスタンの指導者であつて、三八年〔建武十四年〕には葱嶺以東の諸國は皆賢に屬した。そして四一年〔建武十七年〕には西域都護の印綬を與へられた。尤もこの地位はすぐ下げられ、更めて漢大將軍の印綬を授けられたが、賢は依然として大都護と稱し、二二—七三年の間、後漢の兵威がトルキスタンに及ばなかつたのを利用して、その志望を恣にし、諸國はこれを號して單于と呼んだ。コータン (A. D. 50)・クチャー (A. D. 46)・樓蘭〔鄯善〕 (A. D. 46)・拘彌・西夜 (共に A. D. 38)〔實は A. D. 33、建武九年〕等、トルキスタンの主要な諸國のいくつかは、賢に攻められ、賢の任命する支配者や代理を頂いた。

賢の攻勢はパミール及びフェルガーナに及び、三三年これを攻め〔建武九年の西夜征服のことか〕、四六年〔建武二十二年〕〔大宛の〕王を交替せしめた〔拘彌王を大宛王としたことをいう〕。その子不居徹は、六一一六二年〔永平四一五年〕に賢が敗死した後、匈奴の後援によつて位を嗣ぎ、八六年〔元和三年〕まで位に在り、コータン王廣徳に攻められて死に〔不居徹は即位後間もなく廣徳に攻められて滅びた。八六年まで位にあつたというのは誤〕、その子〔實は弟〕齊黎が代つた。

⇒年代的に言つても、支那との交友關係及び支那による叙任から考へても、ヤールカンド〔莎車〕こそ貨幣を發行するに適しい地位にあつたものと思われる。そう考えると、コータンやその東隣の拘彌を併合したことによつて、カロシユティ文字やブラークリット語を用いた事情も解るし、シノ||カロシユティ錢の出土する全地域が、カーシユガル・ヤールカンド・クチャー地方、即ち莎車に服屬していた地方である理由も首肯出来る。又、シノ||カロシユティ錢の發行が突如として終るのは、莎車が八六年〔實は六二年以後間もなく〕コータンに服屬し、一一六六年頃以後永くカーシユガルに支配されたことによるものであらう。

⇒ヤールカンドがサカ族と關係のあるらしいことも、この貨幣をヤールカンドに結びつける可能性を與えるものである。

サカ族との關係は莎車が烏孫と親善關係にあつて、前七三—四八年、烏孫王子萬年（母は支那人）がヤールカンドの王位を嗣いだほどであつたことから推察される。即ち、烏孫の住民の中には、前一六六一—一六〇年頃月氏によつて追われたサカ族がいたし、烏孫住民の服装や一般的性格は捐毒・休循などパミールのサカ族のに似ていたのである。ヤールカンドは追われたサカ族の建設した國の一つであるとも言われている。ヤールカンドとアフガニスタン及びインドとの交渉がもしあつたとすれば、それはパミールを通じてではなく、サリコル (Sarikol) を通じたものであつた。アウレル

Ⅱスタイン卿は、サリコルとカーシユガルとの中間にあつた〔唐代の〕鳥鐵は古代のヤールカンドを含むとさえ言つて
いる。ヤールカンドが多少なりともサカ族に關聯のある國であつたとすれば、それはシノⅡカロシユティー錢の否定す
べからざるサカ的前クシヤンの特色 (undeniably Saka, pre-Kuṣāna character) を説明する助けになるであらう。
シノⅡカロシユティー錢の裏面に右向きの馬を示し、カロシユティー文字でブラークリット語の銘文を打出し、 *mana-*
raja rajatiraja と記しているのは、確かにサカ族のアゼス (Azes) 及びアズィリセス (Azilises) の貨幣に關連のあ
ることを示している。

④莎車王賢は一時コータンを支配していたので、この時コータンからカロシユティー文字とブラークリット語とを得たの
であらう。賢はまた、前述の通り、シノⅡカロシユティー錢の出土する全地域を支配した。

⑤莎車の王、延・康・賢・不居徹・齊黎の名は、貨幣銘文の王名に一致しない。これはコータンの王名の場合と同様に頗
る困難な問題である。従つて今後貨幣の王名そのものが果してヘルンレの解讀した通りでよいかどうかを検討する必要
がある。Gurga- はインドⅡヨーロッパ語のようである。コータンの *Viyāya*- やその他の場合と同様に、姓に準ずる名
(*quasisurname*)、或いは〔王〕族か王朝の名として用いられていると思われるので、これに屬する王の系列を Gurga
王朝と呼んでよいであらう。Gurga- は狼を意味する中世イラン語として誰れが知つてゐる形で、 *Avestan vahra,*
Persian gurg に當る。Gurga- を狼と解することはコータン語で狼を *birga* < *berga* < *barga* < **urgā* や *pan-*
ール地方のイラン方言で狼を指す諸語 (*Yidghan wuri, Shighnan wuri, Burashaski urk*) が *u, u* で始まつてゐる
ことや *Pamiir* Ⅱオクサス地方にクシヤン王朝以前にいた王 *Hurkodes* “Wolf-heart” の名が *g-* で始まつてゐる
ことから、困難に見えるかも知れないが、サカ王 *Gondophares* の名を、その貨幣にはギリシア文字で *YNΔΩEPHC*

と記し、カロシュティー文字で Guduphara と記している例から考えると、カロシュティー文字の専ら行われていたヒンドウクシュ以南の地域では、Hurk/Wurk を Gurg- と記したものと思われる。シノ||カロシュティー錢の Gurg- に續く名稱もイラン語で解釋出来るが、ヘルンレの讀み方が必ずしも決定的であるとは言えないから、今後の研究に俟つべきである。

㉞ ヘルンレが *maharajuthabi* (or *juthubi*, or *yuthabi*) *raja* と讀んだ銘文は、*thu* 又は *tha* が或る標本 (Ancient Khotan, Pl. XLIX) では明かに *sa* りしく讀まれ、*bi* が *ti* 或いは *ri* と讀まれるので、果してこれをヘルンレのよゝに (p) *uthabi* = *pudhavi* (= *Prakrit form of pṛthivi* "earth") と解つて "great king earth-king" と釋いてよいかどうか、頗る疑わしい。寧ろこれは或る地名か、支那の稱號を示しているのではないか。

最後にトオマスは餘論として、

㉟ Hurkodes の貨幣にはギリシア文字及びアラム文字の銘文しかないから、Hurkodes はヒンドウクシュの北方に國したと考えられるが、これと Gurga 王朝との間に關係があつたと見ることは不可能ではない。

㊱ ラプソン (E. J. Rapson) が發見した Athama という王の貨幣には、ギリシア文字||ギリシア語、カロシュティー文字||ブラークリット語の銘文があり、右向きの王の騎馬像がある。これも従來 Azes, Azilises の貨幣に關聯づけられてゐるが、Athama はコータンの古い城内にある最古の神殿 A-dha-ma の卒塔婆の A-dha-ma だ、この卒塔婆は Athama 王の墓であつたかも知れない。

㊲ Gurga 王朝がコータンにあつたとするのは、シノ||カロシュティー錢の大部分がここから出ていることと、コータンの初期の住民の中にインドからの住民がいるという傳承のあることに基くのである。⁽¹⁸⁾これは疑いもなく、コータンにヒ

ンドウクシユの南方から、カロシユティ文字と maharaja rajataraja の稱號とを齎したサカ民族による支配の一時期のあつたことを示している。貨幣の示している時期は、この王朝〔Gurga 王朝〕が俞林(25~55)以前に置かれるべきであるという事實と相俟つて、サカ族の流入がクシヤン族によつてサカ族が征服された結果であることを示しているであろう。何れにしても、貨幣を發行するという考えそのものは、サカ族の國から來たに相違ない。支那の主權の下に發行された貨幣の停止は、支那の影響力がトルキスタンから完全になつた結果であるうと思われ、それは諸國の反抗と紀元十六年以後間もなく入り來つた匈奴の勢力回復とに始まつたのである。コータンに於ける Gurga 王期のよくなインド的王朝の存在については、これまでの發掘からも、支那の記録からも、何らの手懸りを見出すことが出來ない。支那記録に言及のないのは、匈奴やヤールカンドの支配によつて、コータンに五十年以上も混亂の續いたためかも知れないが、寧ろ外國の内部的な、政治に關係のない事情について、支那人が無關心であつたためである。トオマスの論文は我が國では餘り知られていないので、比較的詳しく紹介したが、氏が一方において、シノ||カロシユティ錢がコータン發行のものとは認め難いと論じながら、他方ではコータンでなければ出來ないように言い、年代についても一方では莎車王賢(紀元一世紀中頃)の東トルキスタン支配時代にあるように言いながら、他方では干闥王俞林(25~55)より以前に置くべきであると言つている。これは氏がその提説に自信のなかつたことを示しているものであろう。

(四)

以上が、所謂シノ||カロシユティ錢についてこれまでに提出されている主要な資料と見解とである。そこで次に(イ)出土地、(ロ)カロシユティ文字銘文、(ハ)漢字銘文、(ニ)重量、(ホ)年代及び發行者の五項目に分けて、この貨幣の性質を検討してみ

よう。

- (4) 出土地 今日までに知られている三百箇を越えるシノ||カロシユティイ錢の分布區域は、コータン地方・ヤールカンド・カーシユガル(?)・クチャー・ユルドゥズ||バークに互つているが、コータン地方の遺蹟から出土し、又は出土したと信ぜられるものが大部分を占めていることは、第一章及び第二章の記述によつて明かである。これらコータン地方の諸遺蹟は Domoko 附近 Yötkan, Chalma-kazān, Hanguya Tati, Aq-Sipil Tati, Kizil-yar, Mazār-tāgh に及んでいる。
- コータン地方以外の地域で採集されたものには、コータン地方から出土した後、それらの地域に齎されたものと、それらの地域から出土したものと二種がある筈であるが、今日知られている關係標本がその何れに屬するか區別することは困難である。ただクチャーで購入された七箇とクチャーで購入されたユルドゥズ||バーク出土と傳えられるもの三箇の中、後者は或る時代にこの地に齎られ、スタインの調査した時代(一九一三—一六年)に出土したものらしく思われる。カーシユガルで採集されたという標本については、具體的なことは何等知られていない。スタインの採集品の中にもカーシユガルで入手したものは皆無である。ヤールカンドはコータンの西北にあつて、コータンと交渉の最も密接な地域の一つであるが、この地で購入されたものは僅かに一箇である。又、東方においてコータンに近接し、これと交渉の深かつたニヤ並びにニヤ以東の嘗ての郵善國(樓蘭國)の諸遺蹟からも、今日までシノ||カロシユティイ錢は發見されていない。このことは、既に多くの人々が認めているように、シノ||カロシユティイ錢がコータン地方に最も關係が深く、恐らくこの地方で發行され、専らこの地方において使用されたことを推測させるものであろう。
- (5) カロシユティイ文字銘文 シノ||カロシユティイ錢の銘文に、(4)カロシユティイ文字||ブラークリット語のものと、(4)支那文字||支那語のものとの二種があることは、上に記した通りである。

この中、カロシユネティー文字 \parallel ブラククリット語のものには、二十字ほどのもの（大錢及び小錢の一部）と、十三字ほどのもの（小錢の大部分）との二つがあつて、前者は

(a) *Maharajasa rajadrajasa [Mahata?] sa [Hara?] Mayasa [Hara...?]*

(b) *Maharajasa Rajatirajasa Mahatasa Gugramayasa (or Gugramadasa or Gugradamasa)*

と二様に讀まれている。前の讀み方をとるのは、フォーサイス・ガードナー・カニンガム・ラクープリの諸氏で、その後、ド \parallel モルガン (J. de Morgan)⁽¹⁹⁾・ターン (W. W. Tarn)⁽²⁰⁾・フライエ (Richard N. Frye)⁽²¹⁾の諸氏がヘルマイオス説に従い、原田淑人博士もド \parallel モルガンに従つてこの讀み方を採られたことがある⁽²²⁾。しかし、ホワイトヘッドの指摘しているように、これをヘルマイオスと讀むことは誤りで、ヘルンレの解讀したbの讀み方が正しい。但し、トオマスも述べているように、ヘルンレの讀み方が決定的であるとも言えないのであつて、將來、既收の標本の再検討と、新しく出土すると思われる新標本の研究によつて改訂を加える餘地があることを注意すべきであらう。

十三字ほどの銘文については、ヘルンレは *Maharajuthubi (or juthabi or yuthabi) raja Gugramadasa (or damasa or modasa or fidasa)* と讀み、トオマスは *thu* 又は *tha* が *sa* と讀め、*bi* が *ti* 或いは *ri* と讀める標本のあることを指摘している。ヘルンレは *uthubi* を大地 (*earth*) と解し、トオマスは地名か支那の稱號ではあるまいかと疑つた。しかし、漢書の西域傳に記録されている、ターリム盆地の諸國に漢が與えた官稱（某國王・副王・輔國侯・左右都尉・左右將・左右騎君等）も、後漢書の西域傳に見える、莎車王康に與えた建功懷德王の稱號にしても、賢に授けた西域都護・漢大將軍も、ともにこれに當るとは思われない。元來この稱號は王その人の稱號であるから、支那から與えた稱號があつたとすれば、それは某國王であつた筈で、この部分は國名と見るのが妥當であらう。これに類似の國名を求めると、漢書西域

傳の烏耗 (uch'a, *u-da) 國、更に大唐西域記^二(慈恩傳^五) の烏鐵 (*uo-sat) 國が最も近いようである。この中、烏耗國は皮山 (Guma) の西南千三百里、西は難兜 (Dard) 及び縣度と接したヒンドウクシュ山脉東端の國で、今の Mamuk を中心とする Tisnab 河流域に當り、王は烏耗城に治し、人口僅かに二千七百三十三、勝兵七百四十人という小國であり、「山居田石間、有白草、累石爲室、民接手飲」という文化の低い國で、ターリム盆地からガンダーラ方面に出る路線の上にあつたために、その名が記録されている山中の聚落である。⁽²⁴⁾ この國は後漢書西域傳には烏耗國として記されているが、その規模から考えても到底シノ||カロシユティ一錢の發行國とは信ぜられない。次に烏鐵國については、大唐西域記^二に

(竭盤陁…出葱嶺、至烏鐵國) 烏鐵國、周千餘里、國大都城、周十餘里、南臨徙多河、土沃壤、稼穡殷盛、林樹鬱茂、花菓具繁、多出雜玉、則有白玉、鑿玉、青玉、氣序和風雨順、俗寡禮義、人性剛獷、多詭詐少廉恥、文字語言、少同佉沙國、容貌醜弊、衣服皮褐、然能崇信、敬奉佛法、伽藍十餘所、僧徒減千人、習學小乘教說一切有部、自數百年、王族絕嗣、無別君長、役屬竭盤陁國、城西二百餘里、至大山、山氣龍嵒、觸石興雲、崖隙崢嶸、將崩未墜、其巔峯塔波、儼然奇制也、(中畧)、從此北行山積曠野五百餘里、至佉沙國、

とあり、唐代、竭盤陁 (Tashkurgan in Sarikol) と佉沙 (Kashgar) との中間にあり、葱嶺を越えて東した所で、その西方には俊嶺を控え、これから北行すると五百餘里にして佉沙に至つたのであるから、そのヤールカンドであることは略々疑ない。⁽²⁵⁾ 烏鐵の名は玄奘に至つて始めて現われるが、魏書^{二〇}西域傳に

渠莎國、居故莎車城、在子合 (|| 悉居半 Kargalik) 西北、去代一萬二千九百八十里、

とある渠莎 (ch'i-sha, K'i'u°, *g'i'u°-sua) は恐らくこれと同名で、その原名は *Gusa (or *Kusa) で、烏鐵はその頭音 g- (or k-) の落ちた形であろう。魏略によると、西域の中道に積衆國・莎車國・竭石國・渠沙國・西夜國(下略)のあ

つたことを記し、莎車・渠沙の二國を擧げている。これは同一地を譯字の相違によつて誤つて二國としたのではなく、三國時代には近接した別地であつたのが、北魏の頃には兩地が渠沙と合稱されるようになったのではあるまいか。⁽²⁶⁾ いづれにしても、渠沙の名は三國時代以前には遡ることが出来ない。従つて、シノルカロシニティー錢の銘文を *usai* と讀むのが正しいとしても、これに相當する地名を漢代の記録から検出することは困難である。

所でも、シヘルンレの解讀に従つて *uthubi*, *juthubi*, *yuthabi* と讀めば、これに最も近い地名は于闐である。于闐は史記^二大宛傳に于闐、漢書^{上九六}・後漢書^{八一}以下に于闐に作つてゐる。コータンの名は、ニヤ等出土の所謂カロシニティー文書に *Khotana*, *Khotanna* とあり、⁽²⁷⁾ 大唐西域記^二にはこれを瞿薩旦那 (*Gaustana-desa*)**gostana* ~: *Kustana* ⁽²⁸⁾ 國と記し、

唐言地乳、卽其俗之雅言也、俗語謂之渙那國、匈奴謂之于遁、諸胡謂之斡旦、印度謂之屈丹、舊曰于闐訛也、

と説明してゐる。渙那はコータン語文書の ⁽²⁹⁾ *Hvanna* (for *Hvanna*, *Hvana*) に、于遁は十一世紀のカーシニヤガリー (*Mahmud al-Kashgari*) のトルコ語字書 (*Diwan lughat at-Turk*) にコータン及びその住民を指すものとして擧げた *Udun* に當り、⁽³⁰⁾ 斡旦は中世イラン語の **kh'atan* > *khotan*, ⁽³¹⁾ トルコ語の *Xotan*、⁽³²⁾ 屈丹は梵語で于闐を指す嬌唎多曩 *Kauntana* ⁽³³⁾ に相當するのであろう。カールグレンの復原に従うと、于闐の唐代(長安方言)音は **ju-dien* である(于はドイツ語 *ja* のそれ)。玄奘が「舊曰于闐訛也」と言つてゐるのは、當時コータン及びその周邊の地域でのコータンと呼ぶ名が、于闐と異なること上述の如くであつたからに相違ない。しかし、唐代のチベット語文書にコータンを *hU-then* ⁽³⁴⁾ コータン語文書に *Yutimni*, *Yutimni khhi* ⁽³⁵⁾ とあるのは、それぞれ于闐・于闐國の對音であるから、于闐という支那名に基づく呼稱もチベット人やコータン人の間に行われていたのである。漢代のコータンがコータンやその周邊の中央アジア諸國で何

と呼ばれていたか明かでない。ヘルマンはプトレミイの地理書の *Xaivava* を *Xaivava* の誤として、これをコータンに比定している。⁽³⁶⁾ この比定が正しければ、プトレミイがこの方面の地理を記述する時基本資料として用いたマリヌス(Marinus)には、コータンはこの名で知られていたことになる。私は *Xaivava* がコータンであるとすれば、それは寧ろ *Xaivava* (for *Khodan or *Khudan) の誤ではないかと考える。マリヌスは紀元二世紀の初めの人で、班超・班勇が西域で活躍していた頃に築えていたのであるから、于闐(漢書・後漢書)の原音もこれに近かつたであろう。于寘(史記・魏略)も同音の異譯に相違ない。(史記索隱には「寘音田、又音殿」とあり、漢書の顔師古注には「師古曰、闐字與寘同音、徒賢反、又音徒見反」とある。これらは共に唐代の音を示したもので、カールグレンによると、前述の如く、于闐は **ju-dien* と音じたのであるが、その漢代音も略々これと同様であつたろう。ただ于は *giu* と音ぜられていたかも知れない。⁽³⁷⁾ シノ|| カロシユティー錢の銘文 (y or j) *uthu* (or *tha*) *bi* に最も近いのは于闐・于寘である。カロシユティー文字の *bi* と *ni* とやや似ているので、語尾の *bi* は實は *ni* と讀まるべきものではなからうか。唐代于闐がコータン語文書に *yutimni* と寫されているのを参考すべきであらう。この點については更に今後の調査に俟ちたい。ターリム盆地の諸國の王がその國名を *-raja*, *-isvara* (共に王の義) の前につけて、某國王と稱したことは、キシル (*Qyzil*) 出土の唐代の梵文文書の中にクチャ一王を *Kucisvara* 或は *Kucimaharaja* と記しつゝるのによつて明かである。⁽³⁸⁾ 従つて于闐王が **uthuni* or **uthaniraja* と稱したとしても、何等異とするに足らぬ。

勿論 (y or j) *uthu* (or *utha*) *bi* を官名・地名以外の或る名稱と解することも可能である。ヘルンレがこれを大地としたことは前述の通りであるが、バクトリア王國・サカ (Indo-Scythians or Indo-Parthians)、クシヤンの諸王の中「大地の王」と稱したものは、クシヤンのヴィマ||カドフィセスの金貨の中に、

については又後に觸れる。

カロシユティール文字銘文の王名 *Gugra* (*Gurga*) に関する部分については、前に引いたトオマスの詳考があるので、ここには省略し、唐代のサマルカンド王に *Utrak* (*urk*) (A. D. 710-736) という人のあつたことを附記するに止める。⁽⁴⁰⁾

(a) 漢字銘文 シノ||カロシユティール錢の漢字銘文の中、先づ大錢のそれは、これまでいろいろに讀まれて來た。

1 (錢?) 重二兩四銖 (ドゥ||ラクープリ)

2 (金??) 重一兩四銖 (ドゥ||ラクープリ [訂正]・ドゥ||モルガン)

3 重兩四銖銅錢 (ヘルンレ)

4 重廿四銖鉛錢 (ブシエル)

しかし、この銘文は楊聯陞氏が讀んだように、

5 銅錢重廿四銖 (楊聯陞⁴¹)

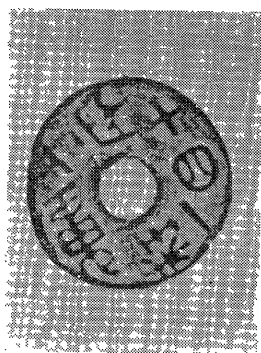
と解するのが正しい。そして、それはこの貨幣が銅錢でその重さが二十四銖であることを示しているのである。二十四銖は即ち一兩であるが、多くの人が兩と讀んだのは廿の字に他ならなかつた。

次に小錢に見られる漢字銘文は、普通

1 六銖錢 (ヘルンレ・ブシエル・ドゥヴェリア) と讀まれているが、

2 五朱 (ドゥヴェリア)

3 半金 (ドゥ||ラクープリ・プラン)



(3) 秦の圓錢
(東亞錢志卷六)

と讀む人もある。この中、「半金」と「五朱」は、前述のように誤讀である。六銖錢という銘文は六を上段に、銖を下段右に、錢を下段左に書いてある。しかもその書體がまちまちで、上段の六の字や銖の傍や錢の偏が出ていないことが多いので、支那の五銖錢との聯想から、五銖又は五朱と誤讀されることがあつたようである。ドゥヴェリアの五朱もその一例であるが、羽田亨博士はその「西域文明史概論」(一一四—一五頁、圖版第八の(4))にスタインの Serindia, IV, Plate CXL 所載の小錢の寫眞を掲げ、次のように記している。

スタイン氏は第一回の探檢で和闐タムルに近いヨトカン (Yotkan) といふ地から、一面に漢字、他面にカロスチー文字といふて、この地方で約五世紀頃まで行はれたと思はれる文字を用ゐて、于闐の語を刻した貨幣(圖版第八の(3)參照)を少からず得た。漢字で五銖と刻して貨幣の價格を示してある以上、この貨幣が支那の主權の下に行はれたものであるべきことは略ぼ疑を容れない所であるが、それにも係らずその形は同じくこの地から出た王莽の貨泉の如き支那風のものとは違ひ、方孔も無ければ縁輪も無く、全く所謂大月氏即ちクシャナの有名な迦膩色迦王の貨幣などと同形である。前記の馬や駱駝などの記號の打ち出しても、無論支那の風では無くして後者のそれである。此の貨幣の示す事實は、思ふに當時此の地方が支那の主權に従ひ、五銖といふ價格を貨幣に打出しながら、然も貨幣そのものは依然として從來其の地方に行はれた形式を保存し、支那の風に據らなかつたことを示すもので、またこれ支那文明がこの地の文明を變化せしめるに至らなかつたことを證示するものと解釋すべきであらう。たゞこの貨幣が何時のものであるかを的確に定め得ないのは残念であるが、その用いられているカロスチー文字の上から考へて、今の知識ではほど五世紀以前のものであることだけは過らない筈である。(傍點は榎)

しかし、博士の示している圖版は明かに六銖錢と讀まれるものである(十三頁插圖2參照)。博士は六の上半と銖の右半と

がはつきり出ていない上に、銖の金偏が金とあつて、五と讀んで讀めないこともないため、これを五とし、更に錢を銖と誤讀して右のような推論を行われたとしか考えられない。松田壽男博士も羽田博士の讀み方に従い、

因みにスタイン氏は、于闐の故都ヨートカン遺趾において、大體五世紀頃まで通用したと認められる珍しい貨幣を發見した。それには一面にカロスチー文字と動物の像とが刻まれ、明かにクシヤン朝の貨幣を思はせてゐるが、他面には漢字で「五銖」と打出されてゐる。(平凡社世界史大系第十卷、五九頁)

とし、更に羽田博士がこの貨幣を支那の主權の下に鑄造されたと推定したのであるを駁し、

唐代ならばいざ知らず、その以前にこの地方に及んだ支那の政治的勢力は、貨幣を改鑄させる程絶對的であつたとは思はれない。假に于闐がその頃支那主權に服従してゐたとしても、それは貨幣鑄造の直接原因ではなく、むしろ支那勢力をこの地方にまで擴大させた貿易關係こそ、于闐をしてかかる珍貨を作り出させたのである。イランや北インドの商賣が集る于闐の國にクシヤン式の貨幣が通用したのが當然であると共に、東方から進出してきた支那人との交易の便宜上、また必要上、その一面に漢字を刻んで一定の價格を表示したこともまた無理ならぬ次第と思はれる。東西陸路の貿易上における于闐の位置を示す好例である。(同右)

と論ぜられた。この貨幣が支那主權の下に鑄造されたものか、支那人との交易の便宜上作られたものか、それは次章において考へるとして、五銖と讀む點においては兩者同じであつた。原田淑人博士も亦「班固の與弟班超書に就いて」(東方學報、東京、第十一冊、三四—三八頁)と題する論文でこの貨幣に言及し、羽田・松田兩博士の取上げられた貨幣と同種のもので、ドゥーモルガンの目録に出ていることを指摘し、その挿圖を掲げられたが、それには明かに六銖錢と書かれている。いづれにしても、私が直接間接に調査した限りでは、五銖と讀まれるものは全くない。

ヘルンレは、第四種の小銭の重量が十三グレイン乃至四十グレインしかないので、四銖錢であるかも知れぬと疑つてい
る。しかし、私が實物に當つた限りでは、二四(63)及び三三・五(71)グレイン(括弧内の數字はヘルンレ報告の番號)
のものにも明白に六銖錢と記されているので、重量の如何に拘らず、標記はすべて六銖錢とあつたと断定してよい。

㊦ 重量 シノⅡカロシュティール錢の重量は頗る不同である。最初ヘルンレは七十三箇の標本について計測し、大錢九箇
の平均を二一三・四四グレイン(二三・六六〇一六グラム)、小錢六十三箇の平均を四七・八五七グレイン(三・〇六二八四
八グラム)としたが、その後、大錢一、小錢二十四を加えた結果、大錢の平均を二一一・一(二三・五一〇一四グラム)、小
錢の平均を四六・〇八グレイン(二・九四九二二グラム)とした。增加分に屬する標本の各々の計測の結果は省略されてい

| | Ser. No. | Variety | Weight in grain | Size in inches |
|---|----------|---------|-----------------|----------------|
| 大 | 1 | I | 246.5 | 1.0 |
| | 2—4 | II | 228.0—154.0 | 1.0—0.875 |
| | 5 | III | 234.0 | 1.0 |
| 錢 | 6—9 | 不明 | 223.0—202.0 | 1.0 |
| 小 | 1—17 | I | 76.0—21.0 | 0.75—0.625 |
| | 18—30 | II | 78.5—44.0 | 0.75 |
| | 31—33 | III | 61.5—47.0 | 0.75 |
| | 34—37 | IV | 40.0—13.0 | 0.75—0.5 |
| | 38—40 | V | 63.5—59.0 | 0.83—0.75 |
| 錢 | 41—63 | 不明 | 60.0—24.0 | 0.75—0.625 |

るが、最初の七十二個については、大錢を三種、小錢を五種に分け、標本の一つについて形式・重量・大きさを記述している。今、各形式の最大最小をとつて示すと前頁の表の通りである。

大錢の標量は二十四銖、小錢のは六銖で、兩者の比率は四對一になつてゐるが、ヘルンレの計測による平均値の比率も大體それに近い。シノ||カロシユティ―錢が秤量貨幣で、その重量が價格を示していたものであることはこれによつても明らかである。吳承洛著・程理濬修訂の「中國度量衡史」(上海、商務印書館、一九五七年、第十四表中國歷代兩斤の重量標準變遷表)によると、周から隋までの一兩及び六銖の重さは次の如くである。(單位グラム)

| | 一 兩 | 六 銖 |
|--------------|-------|--------|
| 周 | 14.93 | 3.7325 |
| 秦 | 16.14 | 4.035 |
| 漢 | 16.14 | 4.035 |
| 新 | 13.92 | 3.48 |
| 後漢 | 13.92 | 3.48 |
| 魏 | 13.92 | 3.48 |
| 晉 | 13.92 | 3.48 |
| 南齊 | 20.88 | 5.22 |
| 梁・陳 | 13.92 | 3.48 |
| 北魏 | 13.92 | 3.48 |
| 東魏 } 北齊 } | 27.84 | 6.96 |
| 北周 | 15.66 | 3.915 |
| 隋 (581-620) | 41.76 | 10.48 |
| 隋 (603-618) | 13.92 | 3.48 |

シノ||カロシユティ―錢の一兩を平均一三・五一〇グラムとすると、新・後漢・魏・晉・梁・陳・隋(603~618)の一兩に

最も近く、周がこれに次ぎ、一四・五四グラムとすると、周が最も近く、新以下がこれに次いでいる。しかし右の表の數値がどこまで信用出来るのか明かでないばかりでなく、シノ⁽⁴⁾カロシユティー錢の一兩の實重そのものが明瞭でないのであるから、こうした比較から結論を出すことは避くべきであろう。重要なことは、大錢と小錢の比率が四對一である事實である。

(五)

(4) 年代及び發行者 さて以上の諸點を考慮しながら、シノ⁽⁴⁾カロシユティー錢の年代及び發行者について推定を試みたい。これに就いて從來説かれている所を表示すると、次の如くである。

- 1 ヘルマイオス(フォーサイス・ガードナー・カニンガム・スベヒトその他)
- 2 大錢はヘルマイオスと同盟した月氏王クジュラ⁽⁵⁾カササ⁽⁶⁾クシャナが前四〇—三〇年頃發行、小錢の中、カロシユティー文字のないものは、月氏がバクトリアのギリシア人と交渉のなかつた時代に發行した(ド⁽⁷⁾ラク⁽⁸⁾プ⁽⁹⁾リ)
- 3 貨幣の中、古いものは字體から考えて、恐らく前漢に屬し、後漢には降らないと思われる(ブシエル)
- 4 班超が發行した(プラン)
- 5 後漢の支配下にあつた于闐王が紀元七〇—二〇〇年代に發行した(ヘルンレ)
- 6 貨幣はすべてコータン出土、紀元一—二世紀(ホワイトヘッド)
- 7 コータンの貨幣であるが、その年代は後漢末より降る可能性がある(スタイン)
- 8 支那の主權の下に發行されたコータンの貨幣、紀元五世紀以前(羽田)

9 支那の主權とは關係ないコータンの貨幣、紀元五世紀以前（松田）

10 六銖錢の鑄造された陳の宣帝太建十一年（五七九）、朱を銖の意味に用いた宋の明帝泰始元年（四六五）及び梁（五〇

二—五五六）と關係がある（ドゥヴェリア）

11 莎車（ヤールカンド）のサカ族の貨幣、紀元一世紀。或いは于闐王俞林（二五—五五年頃）の時代以前に遡らせ得る（トオマス）

この中、銘文の誤讀からヘルマイオスと關係づける1・2、班超に結びつける4の採り難いことは、既に述べた所である。また六銖錢という銘文から、これを陳の宣帝の大建十一年（五七九）七月發行された大貨六銖に、朱を銖に通用させた宋・梁に結びつけるドゥヴェリアの説にも賛成出来ない。朱は銖を誤つたものであるから問題外であるが、陳の大貨六銖は發行後三年足らずの短期間行われたもので、⁽⁴³⁾それ以後鑄造されたことはなく、陳とターリム盆地諸國との間に密接な交渉があつたのではない。また書體から考えても、シノ||カロシユティ錢が六世紀後半まで降るとは思えない。

シノ||カロシユティ錢が二十四銖・六銖と支那の秤量を標示している所から、支那の同じ標量の貨幣に比較しようとするのは妥當であるが、支那には二十四銖（一兩）を標示した貨幣もなければ、陳の大貨六銖以外には六銖を標示しているものもない。説文によると六銖は錙、八銖は銓とされている。この中、八銖は呂后二年（186 B. C.）半兩の名目で發行した八銖錢の重量と同じであるが、六銖を意味する錙は重量の單位としては存在したが、貨幣にこれに當る重さのものがあつたか否か、必ずしも明かでない。秦錢といわれるものの中に一つに兩留の銘文のあるものがあり、これは兩錙と同文で十二銖即ち半兩の意味であるという（東亞錢志卷七、十二左）。しかし⁽⁴⁴⁾錙即ち六銖を標したものは知られていない。また所謂蟻鼻錢の銘文に「各(?)六朱」と讀めそうなものがあるが、この讀み方は必ずしも確かなものではないので、ここには問題にしない。

漢書三 呂后紀に「六年行五分錢」とある五分錢について、これを半兩の十分の五即ち六銖であるとする田中啓文氏の提説があり、氏は多く見受けられる大半兩（十二銖）と八銖半兩の中間の形の半兩錢をこれに比定している。⁽⁴⁵⁾確かに五分は十分の五を意味するのが普通であつて、この解釋は文義の上からは誤であると言えないけれども、當時の事情をよく考えてみるとやはり蔡雲の解釋したように半兩の五分の一即ち二銖四綮の錢であつたとするのが正しいと思われる。⁽⁴⁶⁾即ち史記~~平準書~~³⁰に「至孝文時、莢錢益多輕、乃更鑄四銖錢、其文爲半兩」とあり、漢書^{三四}食貨志にも同じ意味のことが見えている。もし呂后の六年に發行されたのが六銖錢であつたとすれば、それは莢錢とは言い得ないから、この文章に合わないし、文帝が錢の輕いことを憂いて四銖錢を鑄たことにも照應しない。この文章は五分錢を二銖四綮という、極めて輕い錢と解して始めて意味をなすようである。また俗に子母相權といわれる、標準貨幣と補助貨幣の倍率も、二・三・五・十で、⁽⁴⁷⁾四對一という場合は戰國の齊の圓錢（圓形貨幣）の賧四化・賧（一）化を除いては絶無であつた。なほ、關野雄博士はこれらの齊錢を實測して、四化が八銖（五・三グラム程度）、（一）化が二銖（一・三グラム程度）に當ることを記されているけれども、⁽⁴⁸⁾王毓銓氏の實測の結果によると、（二）化は二・三五、二・一五、一・三五、一・一五、一・一〇、一・三〇、一・二〇、四化は六・〇〇、六・一五、五・七七、五・四五、六・五〇、六・六〇、六・五〇、四・七〇（單位グラム）で、⁽⁴⁹⁾標本によつて相當の差があることが知られる。（従つて貨幣の標準重量の決定に當つては、他に明白な基準が見出される場合以外は、相當多くの標本について計測を行つた上で考える必要があるであらう。）

これに對し、バクトリア王國及びその前後の中央アジア・インドのギリシア人國家では、アッティカの幣制に倣つて貨幣を鑄造した。アッティカでは $10 \cdot 4 \cdot 1 \cdot 1 \frac{1}{2} \cdot 1 \frac{1}{3} \cdot 1 \frac{1}{4} \cdot 1 \frac{1}{6} \cdot 1 \frac{1}{12} \cdot 1 \frac{1}{24}$ （單位ドラクマ）の十種の貨幣が發行された。⁽⁴⁸⁾バクトリア王國その他でこの悉くの種類のものが發行されたかどうかは明かでないが、⁽⁵⁰⁾現在知られている所では、四對

(50)

一の比率を有する二ドラクマと半ドラクマの通貨が最も多かつたようである。クシャン王朝も大體この制度によつていたらしい。^(註) こうした事情を考えると、シノ||カロシユティー錢に二十四銖と六銖の二種があるのは、秤量は支那のによりながら、倍率はヒンドゥックシユ南北のギリシア人國家で行われていたのを採用したと考えるのが妥當であらう。この意味から言つても、シノ||カロシユティー錢を陳の宣帝の時にまで引下げるのは困難である。

1・2・4・10の四説を除去すると、残るのはコータン説とヤールカンド説とで、コータン説では年代や發行の事情について異説があるということになる。

トオマスがコータン説を斥けてヤールカンド説を主張した論據は、第三章に詳しく紹介した通りである。なるほど、(前漢末から後漢初にかけて莎車がターリム盆地の大勢力として于闐を壓到し支配していたこと、(シノ||カロシユティー錢のサカ民族的特色はサカとの關係の密接であつたと思われる莎車のものとしてよりよく理解出来るという二點においてはヤールカンド説が優つていように見えるが、(シノ||カロシユティー錢の大部分がコータン地方から出土しているのに、ヤールカンドから出土したという確かな例が一つもないこと、(ヤールカンド地方にカロシユティー文字の行われていた根迹は今日まで何一つ發見されていないのに、コータン地方からはカロシユティー文字の *Dharmapada* の出土があり、^(註) コータンの東隣のニヤ遺蹟並びその東方地域から多くのカロシユティー文字の文書が出土していることは、コータン説の絶対に有利な所である。一方、莎車にも于闐にもシノ||カロシユティー錢に見える王名に該當する王の見出されないのは、兩説に共に不利な事實と言へるであらう。

漢書^{九六}西域傳によると、于闐の戸數は三千三百、口數は萬九千三百とあり、後漢書^{八一}西域傳によると、戸數三萬二千、人口八萬三千とある。この數字が確かであれば、于闐は後漢代(恐らく西紀一世紀後半二世紀初頭、班超・班勇の頃)に戸

數において前漢代の十倍、口數において四倍強に増加したことになる（戸數と口數との増加の割合が一致しないから、人口八萬三千は十八萬三千の誤か）。王莽の時西域諸國が支那から離叛して以後、于闐は渠勒・皮山を併せ（後漢書）、三國時代には戈盧・扞彌・渠勒をもその支配下に置いた（魏略西戎傳）。これに對し、莎車は前漢代は、戸二千三百三十九、口萬六千三百七十三で、于闐より若干少く、後漢代の統計は出ていないが、一時はターリム盆地の城郭國の全體を支配する大勢力となつた。一體、ターリム盆地の城郭國の規模は、その農業生産の基盤であるオアシスの面積に限りがあるので、極めて小さなものであつた。それは漢書・後漢書に記されている戸口統計から十分推測される。即ち、前漢書から人口一萬以上の國を摘記して見ても、僅かに鄯善（萬四千一百）・扞彌（二萬四十）・于闐・莎車・疏勒（萬八千六百四十七）・姑墨（二萬四千五百）・龜茲（八萬一千三百一十七）・焉耆（三萬二千一百）の八國に過ぎない。この中、鄯善は三國時代には且末・小宛・精絕・樓蘭の四國を併合し、北魏時代に及んだが、ニヤ遺蹟等から出土したカロシユティエー文字の文書（Boyer-Rapson-Senart, *Kharosthi Inscriptions*, 3 Vols., Oxford 1920-29）によると、この國の王は自ら例えを

(No. 655) *Maharaya rayatiraya mahanta jayanta dharmia* [sacadhastu] da pracach[devada nuava maharaya pepiya devaputra (大王) 王中の王、偉人、(持)正、勝者、住眞、神(護)、(大)威、大王、ペーピヤ〔王の名〕、天子)
と稱している。又、エンデレ (Endere) 出土のコータン語文書には、

(No. 661) *Khotana maharaya rayatiraya hinajhasya avijida simhasya* (コータンの大王、王中の王、將軍、⁽⁶³⁾アヴィジダシムハの)

の稱が見える。これらはそれぞれクロライナ王 *Pepiya* 及びコータン王 *Avijida Simha* が「大王、王中の王」と稱し、

クロライナ王の如きはその他に諸種の名稱をつける他、*devaputra* [天子]⁽⁵⁴⁾とさえいつたことを示しているのである。「大王、王中の王」という稱號は古代オリエントの王號から出たもので、古代ペルシア以來、イラン人の王に用いられたのであるが、國中の諸王の中の最高權力者の意味で、必ずしもその國の大小に關係はない。コータンの地方制度は明かでないが、クロライナの場合は王國はいくつかの行政區劃 (*raya, rāja* = kingdom) に分れてい、クロライナ王はそれら諸區劃を統轄する最高の支配者であつたようである。ただそれら區劃の長が王 (*rāja, raya*) と呼ばれていたことを示す文書は未だ檢出されていないが、*rāja* と呼ばれる行政區劃の存したことは明か⁽⁵⁵⁾で、少くとも鄯善國を構成していた且末・小宛・精絕・樓蘭の何れかが *raya (rāja)* であつたことは確かなようである。

これに對し、唐代の龜茲王は *Maharajan* 或は *Kucisvara* とだけ言つて、「王中の王」と稱した形迹はない。しかも龜茲王にはそれに服屬する *Bharukarāja (Aqsu), Hecyuka-rāja (Üch), Sakar [rāja]* があつたのである。⁽⁵⁶⁾更に龜茲は人口から考へても、ターリム盆地最大の國の一つであるのに、その稱號が却つてクロライナ王より遙かに簡單であるのは、王の稱號の繁簡が必ずしも領土の大小、國勢の強弱によらなかつたことを示している。トオマスはコータンの如き小國の王が「大王、王中の王」と稱することの有り得べからざるを説いているけれども、それは決して當を得た推測ではない。況んやコータン王 *Avijida Simha* は自ら「大王、王中の王」と稱してゐるではないか。このコータン王の年代は不明であるが、少くとも隋代以後の王で、⁽⁵⁷⁾當時のコータンの勢力と領域は漢代のそれと大差があつたとは考へられない。

トオマスはまたシノ||カロシユティ―錢のサカ的特色を強調する。先づサカ王マウエス・アゼス・アヅィリセスの貨幣に王の騎馬像があり、カロシユティ―文字で「大王、王中の王」と刻してあるのが、意匠と稱號とにおいてシノ||カロシユティ―錢に共通することである。馬の像の共通することについては、夙にヘルンレ・スタイン等が指摘しているが、マウエスの

は王の騎馬像を現わしたものと(圓形、裸馬を示したもの(右向き、方形)の二種があり、アゼス・アヅィリセスのは何れも王の騎馬像で、裸馬ではない。こうした意匠はバクトリア王國の初期から存在し、第三代ユーティデモス(Euthydemus I)の貨幣に裸馬を現わしたものが⁽⁵⁸⁾あり、ユークラティデス(Eukratides I)にDioskouroiの騎乗を示しているものがあり⁽⁵⁹⁾、後期に西北インド方面を支配したヒポストラトス(Hipostatos)にも騎士の乗馬姿を打出した貨幣がある⁽⁶⁰⁾。ヒポストラトスはマウエス等と同じ頃の人かと思われるが、その製作は精巧美麗を極め、マウエス等の意匠の模倣とは思われない。マウエス等の騎馬圖様は寧ろバクトリア王國以來のギリシア人貨幣の様式を採入れたものであると見るべきであろう⁽⁶¹⁾。

「大王、王中の王」の號は、マウエス等、所謂サカ族(Indo-Scythians and Indo-Parthians)の諸王が頗る類繁に用いたのに反し、バクトリア王國以下ギリシア人の王の貨幣には、初期のユウクラティデス一世⁽⁶²⁾、後期のヘルマイオスの貨幣⁽⁶³⁾に出てくるのを除いては、唯の一例も存しない。これらギリシア人王は「大王」とは言つたが、「王中の王」とは言わなかつた。しかし所謂サカ族がこれを頻用したのは、直接にはバルティアの影響であるが、古代ペルシア帝國以來のイラン人の傳統を繼承し發揚したためであるとして容易に理解出来るのである。従つてシノ||カロシユティ錢の發行者がイラン人であるのならば、マウエス等の所謂サカ族から學んだのではなく、ユークラティデス一世又はヘルマイオスに學び、古代ペルシア以來の傳統を採入れたと解して差支えない。クシヤン王朝でもこの稱號が大いに用いられるが、クシヤン人がイラン系民族であることを思えば、頗る當然の現象であると言えるであろう⁽⁶⁴⁾。

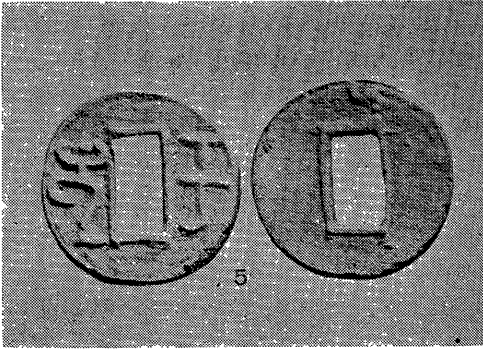
トオマスは、クシヤン王朝に滅されたガンダーラ方面のサカ族の一部がコータン地方に入り、その結果この貨幣が造られたのであらうと推定している。この推定は勿論不可能ではないが、この貨幣の發行者は、サカ民族と接觸する以前に、バクトリア王國及びその後繼のギリシア人政權の貨幣制度の影響を受けたと考えることも可能なのである。一方、所謂サカ族の

現存貨幣の重量は頗るまちまちで、その單位や倍率を決定し難いが、マウエス・アゼス・アヅィリセスの現存貨幣について見ると、一・二・三・四・五・六等の倍率があるようである。従つてその倍率だけからいうと、シノ||カロシユティー錢の四對一はバクトリア王國又はその後のギリシア人國家の制度にならつたとも、サカ族の制度によつたとも言えるであろう。

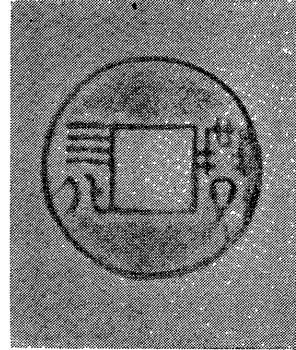
トオマスの擧げている所謂サカ的特色の第二は、王族又は王家名と見られる Gurga がイラン語で解釋出来ることである。しかしこの貨幣を發行した王がイラン語族であつたことは、必ずしも彼がガンダーラ・パンジャーブ及びその周邊地域のサカ族の一人であつたことを意味しない。そして又、この貨幣をヤールカンドに結びつけることにもならないと思われる。トオマスは莎車(ヤールカンド)が休循(Ikesham)・捐毒(Alai Plateau)等漢代塞種(サカ民族)の國に近いこと、サカ民族の混住してゐたと思われる烏孫と親縁關係のあつたことから、そのサカ民族の國であつたことを推定している。この推定を明白に肯定する史料も、明白に否定する史料も見出し得ない今日、この推定は推定として重んぜられねばなるまい。ヘイレイ(H. W. Bailey)氏の如きは、莎車を Saka の音譯であると考えているし⁽⁶⁶⁾、ヘルマン(A. Herrmann)やデリア(P. deHlia)はブトレミイの地理書の *Sora* を **Sorya* の誤としてこれを莎車に當ているから⁽⁶⁷⁾、莎車がその名稱においてもサカに關係のあつたことが愈々確かなようにも見える。従つて私は決して莎車がサカ族の國であつたという推定を排斥しようとは思わない。しかし同時にコータンにもサカ系の民族が據つていたとして一向差支えないことを主張したい。コータンは、唐代前後、ターリム盆地西半(Khotan-Tunshug)に行われていたコータン語の一大中心地である。このコータン語はイラン語を基盤とし、多くのサンスクリットの借用語を含んだ言語であるが、斷片的な資料の残つている古代のサカ民族の言語に共通する若干の特色をもつている所から、サカ語と呼ばれているのであつて、それが實際にサカと呼ばれる民族の言語であつたという確證があるのではない。⁽⁶⁸⁾しかしコータンにコータン語の行われていた事實は、唐代前後、

この地域にサンスクリット語の影響の強いイラン系の言語を操る住民が多数存在した明證であつて、そのことは自ら同じ系統の民族が更に古くからこの方面にいたことを想像させるものである。コータンにはインドからの移民が行われたという傳説がある。¹⁸⁾これも事實を背景にしたものに相違ない。カロシュティー文字・ブラークリット語がコータンからそれ以东ロブノール方面にまで行われていたのは、その動かし難い證據である。しかしコータンの人口の基礎をなしたのは、その西方に接續するアム河上流域の住民と同様に、(サカ民族と呼んで差支えない)イラン系の民族であつたであろう。従つて、その王家がイラン(サカ)語と考えられる *Gingā* を稱していたとして何等支障はないのである。私はトオマスがヤルカンドのみをサカ族に結びつけ、コータンにコータン語の行われていた事實を無視して、その住民をインド人(と支那人と)に限つている理由を理解し得ない。

一體、ヘルンレにしても、トオマスにしても、支那字支那文の銘文のある所から、シノ||カロシュティー錢を支那の勢力が大いにコータン方面に及んだ時期の所産であるとし、これを後漢の前半に擬して疑わなかつた。しかし後漢代の于闐にも莎車にも類似の名の王がいないので、その解決に苦んだ。支那の勢力が西域を歴したのは、前漢の武帝以來のことで、漢末王莽(A. D. 10-23)の失政で一時期タリム盆地は支那の支配を離れたが、後漢の明帝(A. D. 56-78)の時代に至つて再び支那の統制に服するに至つた。しかるに、ヘルンレ等がシノ||カロシュティー錢を前漢に置かないで後漢に當てるのは、サカ王マウエス等の政權がガンダラ・パンジャーブ方面に樹立されるのが、前漢末であり、シノ||カロシュティー錢はサカの貨幣の影響で造られたと見た結果である。サカ族政權がガンダラ・パンジャーブ方面に樹立されたのはマウエスの時で、前八〇—六〇年頃であろう⁶⁹⁾という。そしてその終末については、この地に君臨した塞種(サカ民族)の王烏頭勞が死んでその子が立つと、使を遣して漢に奉獻したが、これを送つて末た漢使文忠を殺害しようとしたので、文忠は容屈王子陰末



(4) コータン地方出土不明古銭
(Ancient Kotan, Pl. LXXXIX)



(5) 齊の脛四化銭
(東亞錢志卷六)

赴と協力して鬪賓王を殺し、陰末赴を代りに王たらしめた所、陰末赴は漢の使者の一行七十餘人を殺した上で、使を出して漢の元帝(48~33 B.C.)に謝したという漢書^{上九六}西域傳鬪賓國の條の記事に基き、陰末赴をギリシア人王ヘルマイオス、烏頭勞をサカ王スパルリス(Spalrys)と見し、元帝の頃鬪賓國即ちガンダール方面のサカ勢力はギリシア勢力に代られたと解釋されている。尤もこの方面のサカ政權はいくつかあつたらしく、これでその全部が滅びたのではなく、或る者は紀元前一世紀の後半か、紀元一世紀前半のクシヤン王朝の抬頭まで残存したと考えられる。

しかし、シノ||カロシュティー銭がその形式・銘文から見て、バクトリア王國の貨幣に近く、必ずしも特にサカ族の貨幣の影響を受けていると認める必要がないとすれば、その年代についてもこれをサカ族のガンダール・パンジアーブ方面進出の時期に結びつけて考えるに及ばない。これに對し、戰國時代の秦の圓錢(圓形貨幣)と稱せられるものが、銘文の形式においても、字體においても、頗るシノ||カロシュティー大錢に類似している事實は注目し得るであらう。更に小錢の篆文字體が布錢の銘文の或るもの、或いは齊の圓錢のあるものに似ている事實も見落し得ない。

所謂圓錢は戰國時代黃河流域及びそれ以北の地帯及び江淮流域に行われた貨

幣の一種であるが、楚には行われた形迹がなく、趙の地域からはこれまで出土した例がないばかりでなく、他地域からの出土品にも趙のものと同様すべき標本は見當らないという。⁽⁷¹⁾それは圓形、無郭或いは有郭、圓孔又は方孔の銅貨で、王毓銓氏の表を借りてその形式を分類すると、次の通りである。

| 區域 | 體形 | 背 | 孔形 | 貨幣單位 |
|-------|----|------|----|------|
| 齊 | 圓 | 扁平無文 | 方孔 | 化 |
| 燕 | " | " | " | " |
| 周・韓・魏 | " | " | 圓孔 | 鉞 |
| 秦 | " | " | " | 兩 |

この中、秦以外の圓錢の銘文は一字乃至四字で、例えば齊の贖錢と呼ばれているものには、贖化・贖二化・贖四化・贖六化の銘文があり、それが贖という土地で發行され、一化乃至六化の重量を有することを示し、周・韓・魏で行われたものには、共で發行されたものに、共・共半鉞・共屯赤金（屯は純に同じ）の銘文があり、垣・長垣で造られたものにはそれぞれ垣・長垣一鉞の銘文があつて、その發行地、金屬の性質、重量を示している。これに對し、秦の圓錢といわれているものには、重一兩十四珠・重一兩十四一珠・重一兩十二珠・重一兩十二珠・半釐（半圓に同じ、二分の一の貨幣單位の錢の意で、半兩即ち十二銖のことであろうという）（以上圓孔無郭）、重十二朱（以上方孔無郭）の銘文があり、單に重量を示すのみで、發行地を記していない。これは戰國末期に秦が通貨を統一し、その鑄造權を中央政府に收め、地域的な鑄錢を許さな

かつた結果であろうと解釋されている。⁽⁷⁸⁾ 珠が銖に通ずることはいうまでもないが、兩・銖は本來秦で行われた重量の單位で、この種の圓錢を秦のものとするのは、主としてそのためである。半叢・重十二朱の二つは、いづれも後期のもので、秦が支那統一以後に發行する半兩錢の先蹤又は母胎をなしたのである。⁽⁷⁹⁾ 説文解字に「兩、再也」とあり、廣雅釋詁に「凡數成偶成雙、通曰兩」とある。王毓銓氏はこのことから重量又は貨幣單位の兩は、それより小さな單位二つを合せて出來た單位で、そのより小さな單位は「十二朱」であつたと考へている。⁽⁷⁸⁾ 妥當な解釋であろう。秦で兩を布錢の單位にし貨幣制度を定めたのは、惠文王二年(336 C.B.)の頃であるらしいが、秦で圓錢を行つたのは戰國の末で、東方中原諸國の制度に倣つたものであろうという。⁽⁷⁶⁾

いわゆる秦の圓錢が果して貨幣であるか、或いは重量の標準を示した分銅の一種であるか、疑問がないわけではない。⁽⁷⁷⁾ しかし、方毓銓氏によると、氏の計測した重一兩十四珠(錢)の一つは一七・七〇グラム、他は九・四一グラム、重一兩十二珠(錢)は八・七六グラム、半叢(錢)は七・〇〇グラム、⁽⁷⁸⁾ 大英博物館所藏の重一兩十四珠(錢)は一七・一七グラム即ち一一・〇八グラムと甚だ不同であつて、決して重量の標準を示した分銅であるとは考へられない。それはこれまで多くの人が認めたとように貨幣であるとすべきである。そしてこの圓錢がシノ||カロシユティイ大錢と、形式においても、「銅錢重廿四銖」という銘文の書體においても頗る類似していることは何人も認めざるを得ないのである。圓錢の銘文も、シノ||カロシユティイ大錢のそれも、時計の針と同じ方向に書かれ、後者には前者の圓孔の代りに圓郭に圍まれた⁽⁸⁰⁾ 尊を中央に記している。これは脛の偏の貝と字形が酷似しているので、恐らく同じく貝を意味し、それが貨幣であることを示しているのに相違ない。「重十二朱」は方孔で、秦の圓錢の中で最も後期に屬するものと考へられているが、銖のみで重量を標示したシノ||カロシユティイ大錢の形式はこの系統をひくものであろう。「重十二朱」錢の重量は明かでないが、「半叢」錢の一つが

七・〇〇〇グラムあるのを標準とすると、一兩即ちその二倍は十四グラムで、ヘルンレによるシノ||カロシュティー大錢の平均値一三・五一〇グラムにはほぼ近いことにもなる。ただシノ||カロシュティー大錢の漢字銘文の外縁に施されている圖様は、支那の貨幣には勿論、バクトリアその他のものにも類似を見出すことが出来ない。

シノ||カロシュティー小錢の六銖錢という銘文の書體には少くとも數種のヴァリアントがあり、中には可成崩れた書體のものもある。これはその重量にヴァリアントの多い事實とともに、小錢が時を異にし、或いは所を異にして幾度か鑄造されたことを物語っている。シノ||カロシュティー錢は錢範を用いて鑄造されたのではなく、定められた重量に近く細分した金屬片に加熱し、文字・文様を陰刻した他の金屬の型に挟んで打出したものである。全體の形がいびつで、文字や文様の位置がゆがんでいるのはそのためである。従つて書體の相違は必ずしも時代の相違を意味しないけれども、ヴァリアントの多いことは、少くともそれが多くの機會に發行されたことを物語っている。又、崩れた書體は漢字に熟さぬ現地人の手に成つたことを示しているであろう。しかしいづれにしても六銖錢の書體は篆文で、圓錢に先行し、或いは併行した布錢の銘文中に、類似のものを容易に發見出来る。シノ||カロシュティー小錢と戰國時代の支那貨幣との連關が頗る密接なことは、こうした比較によつて窺われるであろう。そしてこの小錢はバクトリア王國等で多く行われたアッティカ式貨幣の四對一という倍率に倣つて、二十四銖の大錢の四分の一の六銖とされたのであろう。

私は、右のような比較から、シノ||カロシュティー錢は戰國末期の秦の圓錢とバクトリア王國等で行われたギリシア式貨幣の様式を結合させ、支那の秤量にリンクさせて造られたものであると考える。そしてその時期をバクトリア王國で表面にギリシア字ギリシア語銘文を、裏面にカロシュティー文字プラークリット語銘文を打出した *bilingual coin* の始めて出現するデメトリウス二世 (Demetrius II, 180~165 B. C.)・パンタレオン (Pantaleon, 185~175 B. C.)・アガトクレス

(Agathocles, 180~165 B. C.)・ユークラティデス一世 (Eucratides I, 171~155 B. C.) 等から、後漢の武帝の元狩三年 (120 B. C.) 半兩錢に代つて三銖錢(84)が作られ、元狩五年 (118 B. C.) 五銖錢が發行されて、後者が漢の標準貨幣になり、漢と西域との交通の發達に伴つてターリム盆地にも廣く行われるに至つた以前、即ち紀元前二世紀末から一世紀初に至る間の或る時期であつたと推定する。五銖錢は南北朝の末に至るまで長く支那の標準通貨となつたもので、ターリム盆地の諸遺蹟から多量に出土している。もし五銖錢が行われた後であれば、五銖又はその整数倍の標目の貨幣を造つた方が便利で、殊更に二十四銖とか六銖とかを造ることはあり得ないであらう。半兩錢は始皇帝二十六年 (221 B. C.) 以後鑄造され、その重さは十二銖であつたが、漢政府發行の半兩錢は實重八銖・四銖・五分 (半兩の五分の一、即ち二銖四銖(85))・三銖で、その銘文のみ半兩であつた。しかしその何れにしても、二十四銖の二分の一、三分の一、六分の一、十分の一、八分の一で、シノロカロシユティール錢との換算がさして不便でないものであつた。シノロカロシユティール錢が半兩錢の出現以後に出來たものとするれば、何故に半兩錢の形式を模倣しなかつたか。その理由はいろいろに推測されるが、圓形方孔で半兩の二字を孔の左右に刻している半兩錢よりも、圓形圓孔で周邊に重十何珠と刻した圓錢の方が、ギリシア文字銘文が周邊に施されているバクトリア王國の貨幣の様式に近かつたことも、その一つであつたであらう。

更にバクトリア王國で「大王、王中の王」の號を稱したのはユークラティデス一世 (Eucratides I, 171~155 B. C.) である。この王の貨幣の一つには、表面にギリシア文字ギリシア語で「大王、ユークラティデスの」とあり、裏面にカロシユティール文字プラクリット語で「大王、王中の王の」の稱が見える(86)。これはインドで世界王の意に用いられた Cakravartin に當る稱號として、治下のインド民衆に示すために用いられたと言われているが、バクトリア王國の貨幣の影響を受けているシノロカロシユティール錢の年代の上限は、少くともユークラティデスの頃まで下げられるであらう。前に述べた通り、前

八〇一六〇年頃以後ガンタラ・パンシアープ方面に進出した所謂サカ族やクシャン族の王がしきりにこの號を稱したことは事實であるが、當時支那ではシノ||カロシュティール錢と形式の異なる五銖錢が専ら行われていたのであるから、シノ||カロシュティール錢をこの頃にまで下すことは妥當ではない。

シノ||カロシュティール錢を戰國末期の支那貨幣に結びつけることの可能を傍證するのは、コータン地方から出土している、もう一つの支那式貨幣（圓錢）である。それはヘルンレがコータン周辺の砂漠から出土した支那貨幣の一つとして報告し（*A Collection of Antiquities from Central Asia, Pt. I, JASB, Extra Number I, 1899, p. 18, Pl. II, No. 3*）更にスタインが一九〇〇年十月十六日ヨートカン遺蹟で購入したものである（*Ancient Khotan, I, pp. 205, 575; II, Pl. LXXXIX, No. 5*）。それは圓形方孔の金屬貨幣で、方孔の左右に漢字銘文がある。ヘルンレはこれを「明かに鉛貨」であるとし、重量七八・五グレイン（五・〇一四〇グラム）、直径一・〇六二五インチ（二・六九八七五センチメートル）、銘文は讀めないと述べ、その寫眞を掲げている。スタインとブシエルはこれを銅貨とし、「支那の古錢家にも知られていない支那貨で、コータン地方鑄造のものと思われる。第一字（右側）は于で于闐を意味し、第二字（左側）は恐らく *Fun*（ブシエル）、又は方、或いは先（スタイン）であろう」と記している。ヘルンレの寫眞は倒置されているが、スタインのと同一種類のものであることは容易に知られる。その圓形・背面平素・方孔という形式が齊の圓錢である驗化錢に酷似しているばかりでなく、直径・重量が驗化錢の一標本（二・六センチメートル、五・五二グラム）⁸⁶に近似しているので、私はこれを驗化錢を模倣して作られた貨幣で、于は驗と同じく貨幣の發行地を示めし、左方の不明の文字は恐らくこの貨幣の重量を示す文字であろうと考える。于はスタインの推量の如く于闐を意味しているのである。こうした貨幣がコータン地域から二點出土していることは、この地方に支那の戰國末期の圓錢の影響のあつたことを示すものである。シノ||カロシュティール錢を

戰國末期の秦の圓錢に關係づける私の考察は、ここにも一つの支えを得るようである。ただ半兩錢は出土しているのに、秦の圓錢はまだコータンは勿論、東トルキスタンのどこからも發見されていない。私はその將來における發現を期待している。(四二頁挿圖4・5参照)

シノ||カロシュティー錢の發行地は、從來コータンとされていたが、トオマスはこれに反對してヤールカンド説を唱えた。しかしヤールカンド説の困難なことは前に述べた通りであつて、私も通説に従つてこれをコータン地方で發行されたものと認めた。その理由は、上述した

一、この貨幣は大部分コータン地方から出土している。

二、コータンの住民にはサカ族(イラン人)的要素が多く、更にカロシュティー文字・プラークリット語が行われていた。シノ||カロシュティー錢の王名のサカ(イラン)的特色、カロシュティー文字・プラークリット語の示すインド的性質は、これをコータンのものとして最も自然に理解出来る。

三、その銘文の中の (y or j) uthu (or tha) bi (or ni?) raja は于闐の王の意にもとれる。

ということの他に、コータン地方が玉の産地として戰國時代から支那に知られ、支那人との間に取引關係のあつたことが、併せ考えられるであろう。管子の諸篇に北方における玉の産地として擧げられている禺氏は、この玉の販賣に従事した月氏の異譯であるとされているが、私は寧ろコータンを指したもので、正しくは禺氏 *ngiu-yiei (for y[]) uthu-bi? -ni?) と書かれたのではないかと思う。松田壽男博士によると、コータン方面の玉は春秋末から戰國末にかけて禺氏の玉として支那に知られ、戰國末から漢の武帝の頃にかけて崑崙の玉又は崑山の玉として知られていたといふ⁽²⁷⁾。コータンではこの玉の取引を通じて、支那貨幣特に圓錢に接觸する機會をもち、バクトリア様式の貨幣と結び合せて所謂シノ||カロシュティー錢

を造つたのであろう。秦は渭水の流域に國して戰國時代からターリム盆地に最も近く、西域諸國との通商の一大中心であつた。秦の強盛に赴いた一因は、中央アジアを通じて西方文明に接觸する機會が多かつたことにあると言われている。コータンが秦の圓錢を模倣したのは秦との取引が多かつたために相違ない。漢民族の玉に對する要求は古來頗る熾烈であつた筈で、コータン地方との直接間接の玉貿易は古くから盛んであつたと思われる。この意味からもシノ||カロシュティー錢をコータンに結びつけることは妥當であらう。

但し、私は秦の圓錢やバクトリア王國の貨幣に倣つてコータンでシノ||カロシュティー錢を鑄造したと推定するのであつて、決して玉貿易の決濟のためにこれを造つたというものではない。玉貿易の決濟には支那の貨幣か品物かを使用すれば足る筈で、シノ||カロシュティー錢は寧ろコータン國內の取引に用いられたと見るべきであらう。それはターリム盆地の王國で鑄造された最初の貨幣であるが、コータン地方には、出土品の示す通り、この他に支那・中央アジア・西北インド等周邊諸地域の貨幣も亦行われていたのである。その狀況はコータンの東隣の樓蘭王國(鄯善)で古代ペルシア・ギリシア・インドの貨幣が、樓蘭自身の貨幣と共に行われ、それぞれの間に一定の比價を有していたのと同じであつたらう。⁽⁸⁸⁾シノ||カロシュティー錢がコータンで何と呼ばれていたか、又その貨幣單位を何と言つたか。銅錢と銀錢との比率は如何。またそれがどの位の購賣力をもつていたか。これらを明かにすべき資料は今の所全くない。

もしシノ||カロシュティー錢に漢字とカロシュティー文字の銘文のあることが、支那人とコータン人との兩者を對象としていることを示していると解すべきであるならば、この貨幣の發行は支那人のコータン地方進出が比較的容易になつた時期に行われたもので、それは張騫の歸朝(126 B. C.)以後、漢の勢威が西域を壓倒し、漢使の西域に使用する者頗る多きを加えた時であつたと思われる。またもし四對一の倍率やカロシュティー文字銘文や馬・駱駝の像からこの貨幣を専らコータン

人を對象としたものとすれば、それはセミレチエ地方から出土する開元通寶の裏面に突厥文字を鑄出した銅貨や、同じく唐代のソグド地方で行われた純支那様式(但し銘文はすべてソグド文字ソグド文)の銅貨や、⁽⁸⁹⁾チュルギス(突騎施)の銅貨と同様に、支那貨幣に對する信用を背景に發行されたもので、記録には明記されていないが、戰國末から漢初にかけて秦地方とターリム盆地の諸國(特にコータン)との間に、間接或いは直接の活潑な取引があつた結果の産物と看做すべきではあるまいか。

シノ||カロシュティエ錢の發行者 Gungra-(Gunga-)家(又は王朝)諸王の名が、紀元一二世紀の于闐王・莎車王の中に見出されないのは、彼等がそれより前、漢の武帝か、それ以前の或る時期に榮えた人々であるからに違いない。この王家こそコータンの國際市場としての繁榮を背景に、「大王、王中の王」としてコータン地方を支配したイラン系人(所謂サカ人)であつたと想像される。こうした推察が當つてゐるか否かは、今後の新資料の發現によつて決定されるであらう。

註

- (1) 黃文弼「塔木里盆地考古記」(北京、一九五八年、一一〇頁)。但しシノ||カロシュティエ錢の圖様は馬に限らなむ。駱駝もある。又、古泉匯(頁集卷十二、打馬格錢)によむと、馬錢は本來馬の文様を刻した錢様の銅片で、古の檣浦に似た勝負事に用いられたものである。
- (2) Sir T. Douglas Forsyth, *On the Buried Cities in the Shifting Sands of the Great Desert Gobi*. IRGS, XLVII (1878), p. 12 = *Autobiography and Reminiscence of Sir Douglas Forsyth*, C. B., K. C. S. I., F. R. G. S., edited by his Daughter. London 1887, p. 216.
- (3) A. Cunningham, *Coins of Alexander's Successors in the East*. London 1884 (cf. R. B. Whitehead, *Catalogue of Coins in the Punjab Museum*, Lahore, I, Oxford 1914, p. 166 Note 1)
- (4) 半金は六銖錢といふ銘文の銖を朱と金に別け、更に朱を半と誤讀した結果である。
- (5) 王〇年代 A. Rémusat, *Histoire de la ville de Khotan*, p. 3, 6, 8, 15, 17, 24, 26.
- (6) ロンプのコータン駐在記 (JA. 1898, 2, p. 194)。

- (7) Ed. Blanc, Documents archéologiques relatifs à l'expansion de la civilisation gréco-bactriane au delà du Pamir et à son contact avec la civilisation chinoise dans l'antiquité. Actes du congrès international des Orientalistes. Session XI, Paris 1897, V, p. 238. トラハナド De Markoff 氏がこゝの真鍮造りつゝの發表の附録に記つてゐるが、果つて發表されたか否か、明かでない。
- (8) Ancient Khotan, I, pp. 204~205, 576.
- (9) Serindia, I, p. 101~102, III, p. 1340~49.
- (10) Innermost Asia, I, p. 99, 130, II, p. 822, 988~995.
- (11) George Seaver, Francis Younghusband. London 1952, p. 1.
- (12) R. Shaw, Visits to High Tartary, Yarkand and Kashghar (formerly Chinese Tartary). London 1871 p. 411; The Dictionary of National Biography, under Shaw, Robert Barkley.
- (13) F. W. Thomas, Sino-Kharosthi Coins, The Numismatic Chronicle & Journal of the RNS, 6th Ser., Vol. IV, 1944, p. 84.
- (14) Catalogue of Coins in the Punjab Museum, Lahore, I, Oxford 1914, p. 167, iv.
- (15) 新疆圖志(東方學會刊本) 卷八七 七丁 (『新疆訪古錄』 民國七年刊、三十五丁右)
- (16) 黃文弼「塔里木盆地考古記」(北京、一九五八年、一一〇頁、圖版1〇五②)、『Hoernle, A Collection of Antiquities, Pt. I, p. xiv~xvi, 2~4.
- (17) ブリタニヤ文字のインスマンメントの種別を正したるもの及びタキシラ領土の出土品 (J. Marshall, Taxila, I, p. 15, 164~66, Pl. 34d) 及びインスマンメントの種別を正したるもの (Umberto Scerrato: An inscription of Aśoka discovered in Afghanistan; the bilingual Greek-Aramaic of Kandahar. East and West, IX, Nos. 1~2, 1958, p. 4~6; G. Tucci, U. Scerrato, G. Pugliese Carratelli e G. Levi della Vida, Un edito bilingue Greco-aramaico di Aśoka. (Serie Orientale Roma, XXI) 1958; F. Altheim and R. Stiehl, The Greek-Aramaic Bilingual Inscription of Kandahar and its Philological Importance. East and West, X, No. 4, 1959, p. 243~260; Do, Zwei neue Inschriften. Die aramäische Fassung der Aśoka-Bilinguis von Kandahar. Acta Antiqua, VII, 1~3, 1959, p. 107~126)
- (18) 大唐西域記、卷十一、葱嶺傳、卷五、罽薩回那國の條。
- (19) Manuel de numismatique orientale, I, Paris 1923~1936, p. 363.
- (20) W. W. Tarn, Greeks in Bactria and India, Cambridge 1938, p. 338.

- (21) Notes on the Early Coinage of Transoxiana (Numismatic Notes and Monographs, No. 113), The American Numismatic Society, New York, 1949, p. 7 note 18.
- (22) 原田淑人博士「班固の與羌起書に就いて」(東方學報、東京、第十一冊之「三七號」)。
- (23) Catalogue of Coins in the Punjab Museum, Lahore, I, p. 167 note 1.
- (24) 白鳥庫吉博士「西域史研究」上、一七五—一八七頁。
- (25) 烏魯國について Tashkurgan, Kargalik, Yarkand の決定する三説がある。またこれを漢代の烏魯國と同一と見る説がある。これらについては、白鳥博士「西域史研究」上、一七一—一〇一頁、P. Pelliot, A propos du Tokharien, TP, 1936, p. 279 note 1 参照。
- (26) カラシヤールが明代 Chalish, Cialis・勢力失ひ時では、その後カラシヤールと呼ばれるのは、カラシヤール河の左岸にあるチャリール・シヤル・中心が右岸のカラシヤールに移ったからである (Elias and Ross, The Tarikh-i-Rashidi, see Index; P. d'Eliha, Fonti Ricciane, II, Roma 1949, p. 424 note 2)。後述の西域史のこの区畫のこの名称は、たゞはたは、その。
- (27) Kharoshthi Inscriptions, III, Index; S. Konow, Khotan Studies, J. R. A. S., 1914, p. 342; Doi, Saka Studies, Oslo 1932, p. 145a.
- (28) H. W. Bailey in BSOS, IX, p. 541; X, p. 919.
- (29) F. W. Thomas and Sten Konow, Two Medieval Documents from Tun-Huang (Oslo Etnografiske Museums, Skrifter Bind 3 Hefte 3), Oslo 1929, p. 130, 131, 140.
- (30) C. Brockelmann, Mitteltürkischer Wortschatz, Budapest u. Leipzig 1928, p. 217.
- (31) この説のイラン語は漢字音であるの疑はれがある。
- (32) C. Brockelmann, *op. cit.*, p. 251.
- (33) 梵語雜名(大正藏)五回卷、一三三六頁下。P. C. Bagchi, Deux lexiques sanskrit-chinois, t. I, Paris 1929, p. 77, 295).
- (34) F. W. Thomas in Asia Major, II, p. 256; Two Medieval Documents from Tun-Huang, p. 123, 127.
- (35) H. W. Bailey, BSOS, IX, p. 541; Doi, Khotanese Texts, II, Cambridge 1954, p. 89, 91.
- (36) Das Land der Seide und Tibet, Leipzig 1938, p. 145.
- (37) Analytic Dictionary, Nos. 1317, 1194; Grammata Serica Recensa, Bulletin; MFEA, XXIX, 1957, No. 97.
- (38) H. Lüders, Philologica Indica, Göttingen 1940, p. 539, 542, 599, 609, 615, etc.
- (39) R. C. Majumdar and A. S. Altekar, A New History of the Indian People, VI, Lahore 1946, cf. Index; V. A. Smith, Catalogue of the Coins in the Indian

Museum, I, Pt. IV, The Gupta Dynasty. Oxford 1906.

(40) O. I. Smirnova, Sogdskie money sobraniya numizmaticheskogo otdela gosudarstvennogo Ermitaja, Epigrafika Vostoka, IV, 1951, p. 11.

(41) R. N. Frye, Notes on the Early Coinage of Transoxiana, p. 7 note 18.

(42) 彭信威「中國貨幣史」(上海一九五八年)五〇頁注參照。關野博士は秦の一兩を約十六グラムと推定している(「中國考古學研究」四二五、四五〇頁)。

(43) 隋書^三食貨志。

(44) 彭信威、前掲書、二二二頁。關野博士、前掲書、四三五頁。

(45) 田中啓文氏「六銖半兩錢の新定」(古泉、二十一號、昭和三十一年七月、一一二頁)。相澤平信先生の示教による。

(46) 辯談、卷五、一左一二右。

(47) L. S. Yang, Money and Credit in China. Cambridge, Mass., 1952, p. 33~34.

(48) 關野博士、前掲書、四二七、四三〇頁。

(49) 王毓銓「我國古代貨幣的起源和發展」八四頁。C. Seltman,

A Book of Greek Coins. London 1952, p. 18.

(50) アレキサンダー及びセレウクス王朝・パクトリア王國では、アッティカの標準による實重六七・五グラム(四・三二〇グラム)のドラクマを、ヒンドゥックシュ以南のギリシア人國家では八八グラム(五・〇二七グラム)のドラクマを用いたとい

所謂シノニコロシュティーについて 榎

へ(Brown, The Coins of India, p. 25 note 1).

(15) クニヤン王朝ではローアの dinarius のフロント面の貨幣の造られるようになった。

(22) E. Senart, Le manuscrit Khariših du Dharmapada. Les fragments Dutreuil de Rhins. JA, 1898, p. 193~308.

(23) hīnāhāyā については T. Burrow, 'The language, etc., p. 133 を見よ。

(24) devaputra は中世のサンスクリットの baypuhr (tagfir) に由来して支那語天子の譯であることがわづかしく (S. Lévi, Devaputra, JA, 1934 (1), p. 1 ff.)。その deva はこの稱號を用いた最初はカニシカ王であるとし、J. N. Banerjia はそれに先行したクジュラールカラールカドフイセムであるとしている ('The Title 'Devaputra' on Kuyula Kara Kadphises Coins, JNSI, IX, 2, 1947, p. 78~81)。この devaputra は Devaputra を三十三天以外の諸天の一つで、支那語天子とは關係のなからぬの美稱であると主張した (F. W. Thomas in B. C. Law Volume, Pt. II, p. 307. Banerjia, *op. cit.*, p. 79, note 1 による)。義淨の撰と傳えられる梵語千字文(大正藏五四卷一一九〇頁中、一一九八頁下)に devaputra 彌嚩補陀羅を譯して「皇^{梵天}・皇(一本君に作る)」とあるから、これが天子の意味に理解されていたことは確かであるし、パーリ語で諸天の一つを Devaputra (女性形は devavādiā) といふのを見る

と、或る神の名に於ては正しく (H. Lüders, *Philologica Indica*, p. 86)。[○] クシトラ＝カラム＝サニヤムなるこの號を用いたことは、Mat 出土の Yama Takshmana の像にこの稱號が刻され、これがカドフニヤムと同一人であるとするのに基く。カニシヤカ及びそれ以後のクシヤン王がこの號を用いたことは甚だ明かである。シロナヤン王の場合も天十の意味にして用ひてある。

- (12) Cadota raja (No. 415) の國號や cozbo Somjaka と發する命令の出づる (No. 272) 等の一例である。No. 309 の王が、Somjaka と與へた指令は、この人の管理した地域や raja なる No. 310 に於て人に對して發した二人の男 (或らく奴隷) に向う (即ち他の) raja (para raja) とされる前に捕えよと命令してゐる。トキリスは薩摩に於てこの獨立國を併合したので併合後その國號を raja (Kingdom) とするたのであると推定して (Acta Orientalia, XIII, p. 45; Journal of the Greater India Society, XI, 2, 1944, p. 56-59)。[○] 發する出づるである。

- (13) H. Lüders, *Philologica Indica*, p. 539, 542-43; H. W. Bailey, *Languages of the Saka*. Handbuch der Orientalistik, IV, I, p. 132-133. Bailey は Sakarāja と發する王の號を解して

(14) (A) vijida 等のロータム語文體の Vijitā と發して「Vijida 親」を轉音する (H. W. Bailey, Kanaiśka, JRAS,

1942, p. 4 n. 2; F. W. Thomas, *Some notes on Central Asian Kharoṣṭhi Documents*, BSAS, XI, 3, 1945, p. 52)。[○] Visa 姓の初見は隋書西域傳中題の條で、[○] 單に閉練とある。この Vijita Sinha は貞觀二十三年 (649) 唐に朝貢した尉遲伏闐に當るかも知れない。

- (15) Whitehead, *op. cit.*, No. 16.
 (16) *Ibid. cit.*, Nos. 60-70.
 (17) *Ibid.*, Nos. 610-621.

(18) 所謂サカ族がギリシヤ人の貨幣を模倣して用ゐるこの種類は「*des royaumes bactriens*. Paris 1956, p. 145-151」を參照せよ。これは薩珊國のソブタ王朝及び中世インドの諸國「*Coins of India, Calcutta, 1922, p. 28*」及び「*Monnaies de l'Inde*」の流傳して「*C. J. Brown, The Coinage of Transoxiana, New York 1949, p. 16 ff.*」を參照して。

- (19) V. A. Smith, *A Catalogue of coins in the British Museum Calcutta*, I, p. 11: *P. Gardner, *The British Museum Catalogue. The Greek and Scythic Kings of Bactria*. London 1886, XXX, 12; A. K. Narain, *The coin types of the Indo-Greek kings*, Bombay 1955, p. 11.

- (63) Marshall, Taxila, II, p. 764; Tarn, *op. cit.*, p. 50 3ff.; L. Bachhofer, On Greeks and Śakas in India. JAOS, 1941, p. 240; M. Th. Allouche-Le Page, *op. cit.*, p. 77. "前二述はヘルマノオスの死後、サカ又はバルティア人、或いはクシトラールカデフィセスによつて鑄造されたとする。"
- (64) M. Th. Allouche-Le-Page, L'art monétaire des royanes factrienne, Paris 1956, p. 145.
- (65) 在野「田中」とてついで R. Gauthiot, Paonano Pao (Mélanges d'indianisme offerts par ses élèves à Sylvain Lévi, Paris 1911) を引く。
- (66) Languages of the Saka, Handbuch der Orientalistik, IV, I, Iranistik, p. 133.
- (67) A. Herrmann, Das Land der Seide und Tibet im Lichte der Antike, Leipzig 1938, p. 111, 144; P. d'Elia, Fonti Ricciane, II, p. 411 n. 7.
- (68) H. Lüders, Die Śakas und die 'nordarische' Sprache, Philologica Indica, p. 236-255.
- (69) L. Petech in Civiltà dell'Oriente, Storia, p. 612; S. Konow, Kharoṣṭhi Inscriptions, Calcutta 1929 (Historical Introduction); J. Filliozat in L'Inde classique, I, Paris 1947-49, p. 229 ff.; J. E. Van Lohuizen-de Leeuw, The "Scythian" Period. Leiden 1949, p. 337ff.
- (70) W. W. Tarn, Greeks in Bactria and India, p. 339-~

所謂シノニカロシユタイーについて 榎

- 344 及びそこに引かれている諸家の説参照。これには反対論もあるが、根拠のものである (A. Herrmann in Paulys REAW, s. v. Sakai; A. K. Narain, The Indo-Greeks, Oxford 1957, p. 154-155)。
- (71) 王毓銓「我國古代貨幣の起源和發展」(北京、一九五七年、七三-七八頁)。
- (72) 秦の國錢については、關野雄博士「中國考古學研究」四〇九-四一七頁参照。
- (73) 王毓銓、前掲書、三九、四一、七七、九七頁。但し彭威信「中國貨幣史」(上海、一九五八年、四八頁)は始皇帝の貨幣鑄造權の統一を肯定する。
- (74) 同右七八頁。關野、前掲書、四四〇頁。東亞錢志、卷七、十一、下半葉錢を秦の半兩錢の後に列し、半字の字體の類似に基いて、これを秦錢と推定している。古泉匯も同様。
- (75) 王毓銓、前掲書、八二頁。但し十二録を呼ぶ特別な單位名の存在は知られていない。
- (76) 同右、三九-四〇、七八頁。
- (77) 彭威信「中國貨幣史」(上海、一九五八年、三七頁)。
- (78) 王毓銓、前掲書、八二頁。
- (79) T. de Laouperie, Catalogue of Chinese Coins from the Vith Century B. C. to A. D. 621 including the Series in the British Museum. London 1892, No. 150.
- (80) 王毓銓、前掲書、七八頁。

- (81) 同右八三頁。
- (82) アフガニスタン出土の工具の鑿刻型がギム博物館に陳列されてゐる。按察の註釋を A. N. Zograf, *Antichnye monety (Materialy i Issledovaniya po Arheologii SSSR, No. 16), Moskva-Leningrad 1951, pp. 26~37* を閲す。これによつて鑿刻型のものに金屬を流してのみ、定められた重量に近い金屬片を作つた。しかし、シム＝カロシチャール小鑿の場合には形も頗るあつたが、溶した原料を分量を分つたところから認めらる。
- (83) A. K. Narain, *The Coin Types of the Indo-Greek Kings, Bombay 1955* 參照。年々あつたといふのは、その種別によつて異なる。
- (84) 加藤繁博士「三條綴綴類片分考」(『支那綴綴類片考』上、一九五二—一〇七頁)。
- (85) A. K. Narain, *op. cit.*, p. 10~11; *Do.*, *The Indo-Greeks, p. 74~81*; W. W. Tarn, *Greeks in Bactria and India, p. 217, 264*; M. Th. Alouche-Le-Page, *L'art monétaire des royaumes bactriennes, p. 77*.
- (86) 王毓銓「我國古代貨幣の起源和發展」十四、八四頁。
- (87) 松田壽助博士「屈氏の王の汗珠の珠」(『東西交遊史論叢』)
- (88) Ratha Chandra Agrawala, *Numismatic Data in the Niya Kharosthi Documents from Central Asia, JNSI, XVI, (1954), p. 219~230*. 但し鑿刻の面或の鑿刻が平つたといふことは、其の疑問がある。
- (89) E. Drouin, *Sur quelques monnaies turco-chinoises, Revue Numismatique, 1891, p. 456~457*; E. R. Rygdylon, *Novye runicheskie nadpis. Minusinskogo kraja. Epigrafika Vostoka, IV (1951), p. 92 & Ris. 8~9*. Drouin の譯文の「ベクトロニムトは、友人 A. K. Narain 博士の筆力によつて入手したものである。この記つた譯文を表す。
- (90) O. I. Smirnova, *Monety iz rastopok drevenego Pyandjenta (1947g.) (Trudy sogditsko-tadjikskoi arh. ekspeditsii, I, 1946~1947 gg. Moskva-Leningrad 1950, [MI-ASSR, No. 15] p. 224~231)*; *Do.*, *Sogditskie moneyt kak novyi istochnik dlya istorii srednei Azii. (Sovetskoe Vostokovedenie, VI, 1949, p. 300~367)*; *Do.*, *Sogditskie moneyt sobraniya Numizmaticheskog otdela Gosudarstvennogo Ermitaja. (Epigrafika Vostoka, IV, 1951, p. 2~23)*.
- (91) Drouin Drouin, *op. cit.*; O. J. Smirnova, *O klassifikatsii i legendakh tyurgeshkikh monet. Uchenye Zapiski Instituta Vostokovedeniya, XVI, 1958, p. 527~551*; A. M. Shcherbak, *O chtenii legend na tyurgeshkikh monetakh. Ibid.*, p. 551~561. (東京大學教授)
- 轉記：十六頁。くハトニチ Southern Tibet, VIII, p. 452 に *Kangzava* と *Kan'arava* とあるといふ。Das Land der Seide, p. 121, 145 の *Kangzava* と譯文が異なる。